【年間賞】

第一期（二〇二〇年一月～三月）

【年間賞】

初場所や発止と組んで花の色	岡山	齋藤嘉子	
【次点】			
蓬莱に祀れミシンとこうもり傘	東京	西川遊歩	
大寒の光こぼるる牡丹かな	長崎	川辺酸模	
吊革に羽根休めたり春手套	東京	市村さよみ	
けふの花けふ存分にひらきけり	東京	長井亜紀	
満開の花の記憶の中に棲む	北海道	芳賀匙子	
流木は春の老人ものおもふ	大阪	安藤久美	
【候補】			
無垢無心無口無防備寒卵	福島	渡辺遊太	
青き海と見やれば春の瞳かな	福島	渡辺遊太	
無線とどくただ流氷に遭ふとのみ	福島	渡辺遊太	
見えないものと戦ってゐる地球春	福島	渡辺遊太	
三月の海の底よりピアノ鳴る	福島	渡辺遊太	
目に見えぬ疫の渦へ流し雛	東京	西川遊歩	
三浦よりみどり玉散る春キャベツ	東京	西川遊歩	
食べさせる口の中まで日脚伸ぶ	東京	?井緑天	
鰭酒やまづは目鼻を潤はせ	神奈川	越智淳子	
たくましきうしろ姿や女正月	大阪	古味瑳楓	
雛祀る家に大きな入り日かな	東京	岡　恵	
東京は硝子の迷路春の雪	東京	長井亜紀	
腹時計割と正確寝正月	京都	氷室茉胡	
息白く花のごとしや福娘	大阪	安藤久美	
鬼といふなつかしきものやらふかな	大阪	澤田美那子	
ちどり鳴く心の瓦礫いまだなほ	兵庫	加藤百合子	
風花や吹かれてゐやうしばらくは	兵庫	加藤百合子	
冬虹や海にのびゆく滑走路	長崎	百田直代	

朧夜の渚にならぶ蟹の穴　埼玉　上田雅子　母の日や母が私を忘れても　東京　森凜柚

街中がマスクしてゐる寒さかな　東京　安藤文　今生の句集ものさん玉の汗　長野　金田伸一

クレソンや皿はみ出してゐる勇気　東京　市村さよみ　岩とても老ゆるこの世に更衣　愛知　稲垣雄二

青空をめくれば闇や安吾の忌　北海道　柳一斉　元を取れぬものに子育て茄子の苗　愛知　宗石みずえ

再発も転移もあるな春の雪　岩手　川村杳平　谷翔くる鬼のまぼろしほととぎす　福島　渡辺遊太

ももいろの花が気になる仔馬かな　大阪　高角みつこ　バロックの審美の金魚ひるがへる　東京　西川遊歩

演説も立看もなく卒業す　大阪　齊藤遼風　素早さの尾へと流るる蜥蜴かな　神奈川　越智淳子

蠅生る無より生まるる大宇宙　大分　土谷眞理子　ひとつずつ花の名忘れ晩夏光　新潟　高橋慧

春光やひしと打ちくる時もあり　千葉　水町ゆの　ふと見れば夫は老人柿の花　岐阜　夏井通江

雪折れの枝も花待つこころかな　兵庫　藤岡美惠子　我がために母生きむとす額の花　大阪　内山薫

三人のバレーボールの空を花　奈良　田原春　明日ひらく花の香りや大夕焼　東京　長井亜紀

第二期（四月～六月）　マスク外せばこんなにも草いきれ　兵庫　加藤百合子

【年間賞】　**【候補】**

たいくつはのつぺらぼうやマスクして　埼玉　上田雅子　かなしみの空響もして白鳥帰る　北海道　芳賀匙子

蛇穴を入づ衣擦れの音させて　神奈川　金澤道子

【次点】

アフガンの水路の柳青めるか　岐阜　三好政子
花の下肺も心ももも色に　京都　佐々木まき
春愁の脱け殻一つ朝の寝間　長崎　川辺酸模
想ひの丈を尻尾に込めて猫の恋　神奈川　湯浅菊子
吾が手より春の水飲む貰ひ犬　愛知　青沼尾燈子
顔のなき季語となりけり昭和の日　大阪　高角みつこ
馬ひとつ庭に飼ひたき五月かな　福島　渡辺遊太
考へてもみなかったバナナ洗ひけり　東京　岡　惠
顛末をしづかに見てる金魚かな　神奈川　三玉一郎
春愁の鎧おもたき散歩かな　新潟　安藤文
初幟立てて地球はまはりけり　大阪　古味瑳楓
新品の冷房の風褒めてをり　大阪　高角みつこ
川底の緑深みて鯉病めり　大阪　山中紅蕎
一本の穴子二人で昼の酒　大阪　齊藤遼風
薫風や網繕ふも舟の上　香川　曽根崇

ほたる舟言葉の河に遊びては　大分　山本桃潤
蟻あゆみ蟻たちどまり蟻かしぐ　鹿児島　大西朝子
さむがりの目高一匹鉢の底　神奈川　那珂侑子
昼間から頭に浮かぶビールかな　新潟　安藤文
春眠や醒めて体を組立てる　静岡　池ケ谷章吾
窓放ち聞かむ新樹の大笑ひ　愛知　青沼尾燈子
寝そべれば腹のよく鳴る五月かな　大阪　高角みつこ
箱庭や去年がとうに懐かしき　大阪　高角みつこ
竹の子やこころを留守にしたる間に　兵庫　加藤百合子
蒸しあげて身は白銀の鱸かな　奈良　喜田りえこ
粘りよき泥が自慢の植田かな　和歌山　玉置陽子
もてあそぶ音の涼しき花鋏　愛媛　豊田喜久子
昼寝さめ疫禍の国へ戻りけり　長崎　川辺酸模
担がれて蝶の骨ゆく夏野かな　長崎　川辺酸模
花石榴群れず叫ばず触れ合はず　長崎　百田直代

産土の夜ごと降らすや栗の花　埼玉　佐々木みほ

荒梅雨や雲の内なる山の音　長野　大島一馬

わだつみの深海水芭蕉万のゆらゆら　長野　柚木紀子

金魚玉金魚虚空に遊ぶかな　愛知　稲垣雄二

鮫鰊の心がわかる鯰かな　愛知　青沼尾燈子

つまらなき予報通りの梅雨入りかな　大阪　高角みつこ

七十の浅知恵育て夕端居　奈良　喜田りえこ

中空を揺れつつ上る大毛虫　奈良　田原春

したたるやかんばせうづめ桃食らふ　岡山　齋藤嘉子

アッパッパ痩の止まらぬ副作用　香川　丸亀葉七子

朝顔や今朝濡れ縁の賑はしき　香川　曽根崇

我もまたアジアの民よサングラス　長崎　川辺酸模

父の日や父の椅子には父座る　鹿児島　大西朝子

まだ父に辿り着けない帰省かな　神奈川　三玉一郎

旅は良し家はなほよし青簾　愛媛　豊田喜久子

睡蓮や収まりつかぬ昼の酒　大分　山本桃潤

第三期（七月～九月）

【年間賞】

したたかに生きてしわしわソーダ水　長崎　百田直代

【次点】

術衣着て待つ私以外全部夏　東京　長井亜紀

天空に地球が赤く燃える夏　長野　大島一馬

【候補】

初盆や激しき性も石の下　愛知　青沼尾燈子

海はエロス真白なヨット走らせて　大分　山本桃潤

敗戦忌青柚のごとき学徒らよ　宮城　長谷川冬虹

鈴虫に負けじと蠑螈の鳴く夜かな　長野　金田伸一

葡萄狩る乳房のごとき一房を　埼玉　上田雅子

老の守る遺髪は黒し終戦日　愛知　宗石みずえ

第四期（十月～十二月）

【年間賞】

思想こそ国の柱よ竜の玉　大分　山本桃潤

【次点】

書初の大書は墨の枯るるまで　神奈川　片山ひろし

はや誰か参りし後のけさの春　兵庫　千堂富子

【候補】

水面の黙より氷り始めけり　神奈川　三玉一郎

木枯らしや揺れる屋台で酌み交はす　神奈川　土屋春樹

ちやんちやんこふはりとはおり水仕事　岐阜　夏井通江

大年やそろりそろりと参ろうぞ　香川　元屋奈那子

人の目に腸さらす寒さかな　長崎　川辺酸模

初茜大屋根小屋根わかちあふ　奈良　喜田りえこ

一月十五日号

【特選】

梵天の青年己が湯気の中　秋田　佐藤一郎
無垢無心無口無防備寒卵　福島　渡辺遊太
初晴や芝生の丘に飽きもせず　埼玉　牧内麻衣
筑波嶺の光手元に鍬始　千葉　池田祥子
・上々

寒入りや鷺の啄ばむ日のかけら　千葉　池田祥子
蓬莱に祀れミシンとこうもり傘　東京　西川遊歩
・上々

大寒の海鼠となりてものおもふ　東京　安藤文
食べさせる口の中まで日脚伸ぶ　東京　土井緑天
・上々

鰭酒やまづは目鼻を潤はせ　神奈川　越智淳子
・上々

たくましきうしろ姿や女正月　大阪　古味瑳楓
大寒の光こぼるる牡丹かな　長崎　川辺酸模
・大上々

【入選】

アケマシテ人工音の御慶かな　宮城　長谷川冬虹
冬の夜や大地流転の音すなり　秋田　佐藤一郎
かろうじて油井の残る冬田かな　秋田　佐藤一郎
・残るとあれば上五不要

産土のどんどん遠し鳥総松　福島　渡辺遊太
草の戸の建て付け悪し初日さす　埼玉　園田靖彦
・草の戸、ダメ

われ欠伸猫も欠伸の小春かな　埼玉　園田靖彦
からっ風捨て子に投げた喰物は何　埼玉　佐藤森恵
・からつ風

浅草へ正月を見に出かけけり　埼玉　上田雅子

高鳴りの空に連なる凧　埼玉　牧内麻衣

・リズムに任せないこと。高鳴りの凧

心魂をこめ前のめり初硯　千葉　菊地原弘美

屠蘇祝ふ吾長幼の一番目　千葉　水町ゆの

見晴らせる富士よ筑波よ花の春　千葉　池田祥子

・これは型どおり

御嶽のリフト止まりて鼻毛凍つ　東京　江藤恭太

買初の青菜のしづく悦べリ　東京　市村さよみ

山高帽とつて白寿の礼者かな　東京　松宮京生子

三元号生きて八十お屠蘇かな　東京　森徳典

孫受験手摺頼りの初詣　東京　森徳典

悩む日と悩まぬ日ある海鼠かな　東京　神谷宣行

ペーチカに美しく脚組み替えて　東京　土井緑天

大根のひやとわが手に持ち重り　神奈川　越智淳子

・持ち重る

鮟鱇は末期の水をたらふくと　神奈川　金澤道子

・と、不要。リズムに支配されないこと。

鮟鱇の上目づかひや鞳られゐる　神奈川　金澤道子

・これはどこかの句会でみました。二度出してはいけません。

短日や蜜柑に少し残る青　神奈川　江藤鳥歩

・この場合、短日は中下の駄目押し。あるいは逆。こんな季語の選びかたはダメです。

寒紅が強がつてゐる鏡かな　神奈川　三玉一郎

初旅や手術の母をはげまさん　神奈川　松井恭子

ドクターヘリ大寒の底飛び立てり　神奈川　松井恭子

正月や遠出せずとも本の山　神奈川　水篠けいこ

初日さす雀やわれも素のままに　神奈川　中丸佳音

今年こそ倅に嫁を初詣　神奈川　土屋春樹

寄り添ひて寒さを凌ぐ奈良の鹿　神奈川　土屋春樹

万歩計つけて一年始めけり　長野　金田伸一

男はラグビー天いちめんあばら骨雲　長野　柚木紀子
これなるiPS細胞てのひらに大雪渓　長野　柚木紀子
賽銭箱プールのごとし初詣　岐阜　夏井通江
鳴き交わす鴨や水輪の花のなか　岐阜　夏井通江
母亡くて本に学びし節料理　岐阜　三好政子
・学びぬ
スクラムの湯気立ち上り虹となる　京都　氷室茉胡
・なれ
初鶏や小学校の裏に住み　京都　廣川孝彦
蕎麦すすり水の桑名に年送る　京都　廣川孝彦
われもまた赤子のごとし初湯かな　大阪　安藤久美
鞴の山姥泣けば山も哭く　大阪　古味瑳楓
読初というて二階へ消えたきり　大阪　古味瑳楓
境内の外に待つ犬初詣　大阪　山中紅蕘
大旦建物のみの街になり　大阪　山中紅蕘

寒木瓜やアンリマチスの花の頃　大阪　齊藤遼風
・寒木瓜、ダメ。花に花をつけては。
・こういう俳句の勘所を６００句暗唱で身につけてください。
正月や現も夢も五七五　兵庫　加藤百合子
・現に夢に。
・この違いも６００句暗唱で。
あらてめて二人の縁根深汁　兵庫　藤岡美惠子
原型は知らぬが仏なまこ喰ぶ　兵庫　藤岡美惠子
連山の冬麗にして大あくび　奈良　喜田りえこ
・連山の、の位置。
・これもリズムの奴隷の句。
枝添へて花びら餅や紙の上　和歌山　玉置陽子
御手洗に真白き手拭冬木の芽　香川　丸亀葉七子
一の字のあなどり難し筆始　愛媛　豊田喜久子
寒晴や空の深さへクレーン挙ぐ　愛媛　豊田喜久子

・寒晴の、深みへ、伸ぶ？　大阪　澤田美那子
物云へばかがあとなる寒の朝　兵庫　加藤百合子
はるかなる鎌倉句会春の水　岡山　齋藤嘉子
みそ汁に鯉のぶち切り冬籠　長崎　百田直代
億年の初日を歩むわれらかな　大分　竹中南行
精魂込むる円空仏や寒に入る　大分　土谷眞理子

一月三十一日号

【特選】

大寒やSL列車湯気あげて　岩手　川村杳平
雛祀る家に大きな入り日かな　東京　岡恵
・家の　一句おぼえ二句をわする霜柱
東京は硝子の迷路春の雪　東京　長井亜紀
腹時計割と正確寝正月　京都　氷室茉胡
息白く花のごとしや福娘　大阪　安藤久美
鬼といふなつかしきものやらふかな　大阪　澤田美那子
ちどり鳴く心の瓦礫いまだなほ　大阪　澤田美那子
初場所や発止と組んで花の色　岡山　齋藤嘉子
・花と花　冬虹や海にのびゆく滑走路　長崎　百田直代
・海へ　祖父母より前は知らねど龍の玉　大分　竹中南行

【入選】

雪浴びの跡美しきからすかな　北海道　芳賀匙子
・美しき、不要。　あの島は鬼の棲む島根深汁　秋田　佐藤一郎
・人ごとになっているところ、惜しい。　初春や波と遊びて紙を漉く　福島　渡辺遊太
命ひそむかそけさにこそ寒卵　福島　渡辺遊太
・に、不要。この一字で句が混乱する。

我れ先に尾根駈け上がる野焼かな　埼玉　園田靖彦
寒馬引く鉄ぞりの音響きけり　埼玉　佐々木みほ
風花やわたしが妣と呼ばれる日　埼玉　佐々木みほ
竹馬や出逢ふ前まで好きな人　埼玉　牧内麻衣
・竹馬でないほうがいい。
月を待つ花の蕾や西行忌　千葉　若土裕子
始まりはこの紅梅のこの枝先　千葉　水町ゆの
・紅梅や、紅梅の、からはじめる。紅梅のはじまりはこの枝の先？
人生はどんでん返し雪合戦　東京　西川遊歩
銀座の空冬の三日月見つけたり　東京　稲垣京子
冬の三日月、からはじめる。銀座の空に見つけたり
侘助やかぢかみながら開きけり　神奈川　越智淳子
戻りたり手に一枝の山椿　神奈川　遠藤初恵
御破算で願ひませうと鬱替へる　神奈川　金澤道子

放射線治療ひとまづ春隣り　神奈川　水篠けいこ
早咲の熱海桜や昼の月　神奈川　湯浅菊子
「口あけてんなら目あけてよ」大寒介護　長野　柚木 紀子
生没年未詳とたのしヒヤシンス　長野　柚木 紀子
寒の水飲んで清らな体かな　岐阜　夏井通江
巌を越へざんぶと波の藪椿　愛知　野口優子
・波や、波が
水漬くまいと最後の力破蓮　京都　氷室茉胡
二回目の還暦やある薺粥　大阪　安藤久美
老鹿はいういうかんかんお山焼　大阪　古味瑳楓
つまづきもせぬに転んで手の冷た　大阪　内山薫
・の、不要。
午後四時の陽のまぶしさや冬終る　大阪　内山薫
節分の鬼も手洗ひうがいして　大阪　福田弘子
・せよ

赤鬼は一番人気やらはるる　大阪　澤田美那子

礼あまたかさねかさねて大御歌　兵庫　加藤百合子

寒中の春ゆたかなり菓子司　兵庫　加藤百合子

かすていら春めくもののひとつかな　和歌山　玉置陽子

・常套。

餅談義亡きはらからの思い出に　香川　丸亀葉七子

早春のひかり啄ばむ雀どち　香川　曽根崇

きのふより海荒れてをり梅の花　香川　曽根崇

カツトグラスを曇らせて寒の水　愛媛　豊田喜久子

・寒の水からはじめる。

髪切つて出づる浮世の寒さかな　長崎　川辺酸模

寒卵飯とかき込む夜勤明け　長崎　川辺酸模

二月十五日号

【特選】

朧夜の渚にならぶ蟹の穴　埼玉　上田雅子

街中がマスクしてゐる寒さかな　東京　安藤文

風花や吹かれてゐやうしばらくは　兵庫　加藤百合子

【入選】

冬虹や天の浮橋架かる海　北海道　高橋真樹子

颯と晴れて流氷どこか懐かしき　北海道　芳賀匙子

・どこか、ダメ。

夕間暮れおづおづ月の流氷原　北海道　芳賀匙子

やらはれて鬼の忘れし角一つ　宮城　長谷川冬虹

・きょう仙台句会でお伝えしたとおり、これは理屈です。

行く雁を木切れ拾うて見送りつ　秋田　佐藤一郎

掘炬燵はじめてできた玉結び　埼玉　佐藤森恵

靴音の夫にやあらん春の宵　千葉　若土裕子

蛤やゆらゆら揺るる大都会　千葉　若土裕子

・これも理屈。理屈で解けるのはダメ。

白梅や掃き集めたる茶毘の灰　東京　?井緑天

熱燗やなけなしの詩嚢膨らます　東京　安藤文

ピアノ弾く母の手はげし春の雪　東京　安藤文

水仙を辿り辿れば原爆忌　東京　岡恵

意識して歩幅を広く春浅し　東京　森徳典

・春浅し、が惜しいところ。理由はご自分で。

消炭や竈の夕餉思ひ出す　東京　森徳典

雪柳庭いつぱいに咲きし日々　東京　長尾貴代

高層の窓に溢れる冬日かな　東京　楠原正光

かたち様々色々の木の芽かな　東京　楠原正光

にわか雨傘なしでゆく冬の朝　神奈川　伊藤靖子

マスク買ふ列店内を横切りて　神奈川　伊藤靖子

いつしかにテラスは濡れて春の雨　神奈川　越智淳子

音立てて暗渠の下を春の水　神奈川　遠藤初惠

・どこかにある句。こういう句を作らないためにも、六〇〇句暗唱を。

目の高さに梅見つつ行く路線バス　神奈川　遠藤初惠

三椏の花牧水の若き恋　神奈川　江藤鳥歩

・若き牧水の恋では。

春眠に国ごと呑まれゆきたるか　神奈川　三玉一郎

・言い足りぬ句。

気まぐれに焼くビスケット春の雪　神奈川　山本孝予

春立つや小花模様のワンピース　神奈川　水篠けいこ

埋火や今もいきいき亡き師の語　神奈川　中丸佳音

こたつ舟墨絵の中に流れ入り　神奈川　土屋春樹

・中へ、入る

空無雀躍建国日「けつこうな血圧です」と長野　静岡　柚木紀子

日陰から日陰へ愉し探梅行　静岡　池ケ谷章吾

・愉し、不要。

高々とこれぞ修二会の竹の青　京都　佐々木まき

雪解川ひびけば唄ふ早春賦　京都　廣川孝彦

わだかまる思ひを丸め雪礫　京都　廣川孝彦

饂飩屋の梅咲く庭に腰かけて　大阪　高角みつこ

冬去るをひそかに惜しむこころあり　大阪　内山薫

うぐひす餅の文字ひるがへる雪の中　大阪　内山薫

春の雪一席聞きに天神へ　大阪　木下洋子

腰曲がり指も曲がりてちゃんちゃんこ　兵庫　藤岡美惠子

・や

若枝の天突くばかり梅真白　兵庫　藤岡美惠子

冴え返る謝意を記して逝きし人　兵庫　髙見正樹

桃の枝紅し蕾はうすみどり　奈良　田原春

風止みて連凧のたうちをりにけり　香川　丸亀葉七子

・順番が逆。

梅東風や雑魚のたばしる潮溜り　香川　曽根崇

・たばしる、言葉選択ミス。

長子とて古りし雛を守りけり　愛媛　豊田喜久子

・理屈の上五。

縮緬の花や兎や吊るし雛　愛媛　豊田喜久子

スニーカー湿らすほどに春の雨　長崎　川辺酸模

「折々のうた」毎日六句春きざす　大分　土谷眞理子

二月二十九日号

【特選】

青き海と見やれば春の瞳かな　福島　渡辺遊太

・思へば？

目に見えぬ疫の渦へと流し雛　東京　西川遊歩

クレソンや皿はみ出してゐる勇気　東京　市村さよみ

真つ新な春来ていたり唐津かな　大分　山本桃潤

・春の来てゐる

流氷の怒り声とも嘆きとも　大分　竹中南行

・怒る

【入選】

はす氷動けぬ朝に旅立ちぬ　北海道　高橋真樹子

・動かぬ

晴れ晴れと平常心あり木の根開く　北海道　芳賀匙子

・上五中七、自己観察まだ荒い。

氷解く五明ゆかりの水汲み場　秋田　佐藤一郎

特養の小き窓よりシャボン玉　埼玉　佐々木みほ

囀やたたみ鰯に三、四杯　埼玉　佐々木みほ

・で。てにをは選び、的確に。

春やいま単語カードに六百句　埼玉　上田雅子

・上五理屈。

浄瑠璃の苦海語るや道子の忌　千葉　池田祥子

・で、あるいは、は。

湯茶一会　庫裡馥郁と　臥龍梅　東京　横山直典

・一字あきが句を縛っている。

春風やこんにちはのこゑうしろから　東京　岡恵

米研ぎの手の軽やかに雨水かな　東京　荒木大和

・米を研ぐ？

春立つや水細くして筆洗ふ　東京　長井亜紀

恋とても哀しき顔の猫ばかり　東京　長井亜紀

・どちらも細い。気持ちの切り替えを。

春の雪ホットコーヒー手に持ちて　東京　楠原正光

また消えて畳に一粒雛あられ　神奈川　越智淳子

・また現れて？

ゆく雲をながめてゐたる寝釈迦かな　神奈川　金澤道子

相模川雲雀の空のありにけり　神奈川　金澤道子

春が来てなほ春を待つ心あり　神奈川　三玉一郎

もう一度昔の暮らし桜餅　神奈川　山本孝予

初蝶をはげましてゐる光かな　神奈川　松井恭子

一連の目刺うれしき夕餉かな　神奈川　水篠けいこ

・ひとつら。かながきに。

伎楽面に大いなる鼻あたたかし　神奈川　中丸佳音
・あたたかし、常套。
吊橋の揺るるほどかな春愁　神奈川　中丸佳音
・かな、再検討。
鳶高しふつと消えたる春の空　長野　大島一馬
・高く、消えたり？
水音は志ひかる声きかす春　長野　柚木紀子
立ち雛や立ち働きて娘は生くる　愛知　宗石みずえ
・下五、わが娘？
我が背子の骨齧るガン暴風雪　愛知　服部紀子
春一番単語カードに六百句　京都　佐々木まき
晩年は優しき夫猫柳　京都　氷室茉胡
継ぎ足しの暗き廊下や梅の宿　大阪　高角みつこ
・継ぎ足して
ベランダに鳩の鳴く声日永かな　兵庫　高見正樹
理髪店皮の大きな椅子うらら　奈良　春
・大きな皮の
うすべにの脚を揃へて鳩の春　和歌山　玉置陽子
菜の花やはるかに青き漠(から)の国　長崎　川辺酸模
天上も凧吹かむ東尋坊　熊本　筑紫秋蘭
春浅し老いて寂しき天守閣　大分　山本桃潤
・上五、再検討。
唐津湾朧の中の波頭　大分　土谷眞理子

三月十五日号

【特選】

青空をめくれば闇や安吾の忌　北海道　柳一斉
青空の濡れてゐるなり花辛夷　北海道　柳一斉
再発も転移もあるな春の雪　岩手　川村杳平
葱刻む今朝は老いたる母のため　宮城　長谷川冬虹
すかんぽを尊びつつも踏みゆけり　秋田　佐藤一郎

無線とどくただ流氷に遭ふとのみ　福島　渡辺遊太
見えないものと戦つてゐる地球春　福島　渡辺遊太
吊革に羽根休めたり春手套　東京　市村さよみ
・春手袋、とはじめる。
けふの花けふ存分にひらきけり　東京　長井亜紀
眠られぬ夜に来て去る春嵐　神奈川　越智淳子
ももいろの花が気になる仔馬かな　大阪　高角みつこ
演説も立看もなく卒業す　大阪　齊藤遼風
放浪の舟にまどろむ花菜かな　大分　竹中南行
蠅生る無より生まるる大宇宙　大分　土谷眞理子
・初蝶や。このままだと理屈を句にしただけ。

【入選】

潮引くや夜明けは風の光る頃　北海道　高橋真樹子
溢るるや揺るるミモザの夕まぐれ　埼玉　佐々木みほ
春雨の小枝に並ぶ雫かな　埼玉　佐藤森恵
・語順。小枝に並ぶ春雨の雫かな、春雨の雫は、か。
菜の花や今も一茶が双樹庵　千葉　若土裕子
桜鯛花びら舞ふごと下ろしけり　千葉　若土裕子
・ごと、消す工夫。
田の神の笑ひ高らか雛の宴　千葉　池田祥子
春愁のコーヒーすする昼間かな　東京　安藤文
・真昼
沈黙を走る地下鉄春の月　東京　安藤文
銀河系宇宙の隅の沈丁花　東京　井上じろ
・隅に
手を洗ふ又手を洗ふ春よ来い　東京　岡惠
ころころとふくぼいでませ春の水　東京　長井亜紀
曙に月傾きぬ人麻呂忌　東京　楠原正光
はずむ声合格告げて春来たる　神奈川　伊藤靖子
春光や年ふりてまた楽しけれ　神奈川　越智淳子

オックスフォード事件現場に柳絮とぶ　神奈川　遠藤初惠
・に、不要。事件の現場
落ちしこと気付いてをらぬ椿かな　神奈川　金澤道子
眠る鯉なめに流る春の川　神奈川　江藤鳥歩
・流れ
もくれんやおおらかな白ほぐさんと　神奈川　山本孝予
と、は何ですか？
春雨は雪へと替わる箱根かな　神奈川　森川ヨシ子
・春の雨
高齢をリスクと言うか春の旅　神奈川　水篠けいこ
・ふ
夏蜜柑二つ転がる寺の庭　神奈川　水篠けいこ
ものの芽に屈み小さきわれとなる　神奈川　中丸佳音
・大きなわれ、巨大なさわれ、でも成り立つ。ということは？
句心のちぢむ二月の寒さかな　長野　金田伸一
平常の心たいせつ初蝶來　長野　金田伸一
春の家鏡の中の人と住む　岐阜　夏井通江
・俳句にかぎらず、ありふれて発想。すでにあるものをなぞるだけでいいんですか？
落ち口に大鯉群るる春の水　岐阜　三好政子
・鯉の群がる？
シクラメン置く場所変わる日差しかな　静岡　池ケ谷章吾
一人とは開け閉てが憂し春障子　愛知　宗石みずえ
・一人ゐて
初蝶や風の穂先をつかまへて　愛知　野口優子
山に消え海に新たに春うれひ　大阪　古味瑳楓
老の春外に出ぬ日をおもしろく　大阪　澤田美那子
早々とこらえきれずに桜かな　兵庫　加藤百合子
粉吐いていともかるさうつくしんぼ　兵庫　藤岡美惠子

ふと夫に優しき言葉水温む　兵庫　藤岡美惠子

・ふと夫の。季語を理屈で取り合わせてはいけない。

椿餅はみ出してゐる雪のいろ　和歌山　玉置陽子

流氷のあかねびたしや浜埋め　岡山　齋藤嘉子

・下五ダメ。

春の野や花束にして貰ひけり　岡山　齋藤嘉子

・春の野を。この句もどこかにある。

春燈グラスきらきら米寿の賀　愛媛　豊田喜久子

初蝶や金魚葬りし石の上　長崎　川辺酸模

・金魚の眠る

初蝶来最期は苦（にが）し父も母も　熊本　筑紫秋蘭

君行くやミモザ溢れる春の朝　鹿児島　大西朝子

三月三十一日号

【特選】

満開の花の記憶の中に棲む　北海道　芳賀匙子

三月の海の中よりピアノ鳴る　福島　渡辺遊太

・底より

春光やひしと打ちくる時もあり　千葉　水町ゆの

三浦よりみどり玉散る春キャベツ　東京　西川遊歩

流木は春の老人ものおもふ　大阪　安藤久美

釜飯の湯気の中から桜鯛　兵庫　加藤百合子

雪折れの枝もて花待つこころかな　兵庫　藤岡美惠子

・て、不要。

三人のバレーボールの空に花　奈良　田原春

・空を

囀りに応へて風も歌ふらし　長崎　百田直代

【入選】

流氷に帰る岸なし家はなし　北海道　高橋真樹子

初蝶と見やれば風の光かな　北海道　柳一斉

三月の月山真白梅真白　宮城　長谷川冬虹

春天やいよいよ白き月の山　宮城　長谷川冬虹

康らかな吾子の寝息や木の根開く　秋田　佐藤一郎

幹打ちて遊ぶ小げらも花の塵　千葉　池田祥子

・上五、描写不全。

くちびるはわが恋の色紅椿　東京　長井亜紀

身をちぢめ潮あふれさす栄螺かな　東京　長井亜紀

春の空腕のばせば佐渡島　東京　長井亜紀

母老いて頬紅買いぬ春の昼　東京　長尾貴代

ほそ長き草の根ひたる春の川　神奈川　越智淳子

・簡潔に。

朝からの雨は上がりぬ花ミモザ　神奈川　江藤鳥歩

盗人よ旨かろふわが春キャベツ　神奈川　松井恭子

・う

遠去かるコックスの声風眩し　神奈川　土屋春樹

自句集の夢をつながん草の餅　長野　金田伸一

カウンターテナー佳コロラトゥーラ否はるは嵐　長野　柚木紀子

日本中どつと笑はせ去りし春　岐阜　夏井通江

囀りの木立楽しも籠り居て　岐阜　三好政子

来世もここに立ちたし畑の春　愛知　宗石みずえ

ゆるゆると一合の酒日永かな　愛知　青沼尾燈子

小雀やベンチで食べるにぎりめし　愛知　中村さち枝

感染症ただならぬ世を桜咲く　愛知　服部紀子

若鮎や水のふところ蹴り上げて　愛知　野口優子

蝶のごとわれも出て見ん朧月夜　京都　佐々木まき

虚ろとは雛仕舞ひたるあとの部屋　京都　佐々木まき

何もかも浄化し給へ春の水　京都　氷室茉胡

傷癒えぬ間に次の恋春の猫　京都　氷室茉胡

しきつめて千の椿や鬼の宿　大阪　古味瑳楓

仲人の縁にいただく新若布　大阪　高角みつこ

・縁で
俎板を濡らし溢れり新若布　大阪　高角みつこ
・溢るる
春の雪人待つ人に積りけり　大阪　山中紅蕘
・つつ
四年目のやうやく花やあけび蔓　大阪　澤田美那子
・四年目に
花びらや蘇民将来おいでませ　大阪　澤田美那子
春夕焼け吾子の描きし父母の顔　大阪　齊藤遼風
・吾、余計。子の描きたる？
春寒や母の背中の手術跡　大阪　齊藤遼風
・背中に
目つぶれば黄泉は金色あたたかし　兵庫　加藤百合子
耕しの大き影ある夕かな　奈良　喜田りえこ
卒業式ボイコットせしかの日あり　和歌山　玉置陽子

紀ノ川をのぼる花桃花杏　和歌山　玉置陽子
白木蓮切られの与三のやうな傷　香川　丸亀葉七子
吹かれ来し花びら二つ畳かな　香川　曽根崇
追ひかけて遍路に渡す祝の餅　香川　曽根崇
鶯や日に睦みあふ出合川　大分　竹中南行
朧月夜己が心に桃源郷　大分　土谷眞理子
・朧月夜、煩わしい。
春北風巨大客船接岸す　鹿児島　大西朝子

四月十五日号

【特選】

かなしみの空響もして白鳥帰る　北海道　芳賀匙子
帽子変へ春風を新たにす　北海道　柳一斉
・リズムととのえる。
花に風人に疫禍のあるごとく　福島　渡辺遊太
コロナ禍に立ち向かふべく柏餅　千葉　若土裕子

全力で手洗ひうがひ新社員　東京　森凜柚
春逝くや名刺交換できぬまま　東京　森凜柚
春月や地球まるごと病んでをり　神奈川　金澤道子
蛇穴を入づ衣擦れの音させて　神奈川　金澤道子
・出づ。すでにあるか。
アフガンの水路の柳青めるか　岐阜　三好政子
花の下肺も心ももも色に　京都　佐々木まき
・心でないほうがいい。
あれに寝る人は路通か花の山　大阪　古味瑳楓
大蒜や病ひおそろし飯うまし　大阪　高角みつこ
鶯の声に負けじと披講かな　大阪　木下洋子
疫癘や海にただよふ花筏　兵庫　加藤百合子
・海を
大難のつづくいつしか柿若葉　香川　丸亀葉七子
目に見えぬ敵に疲弊の暮春かな　愛媛　豊田喜久子

春愁などではなくてこもり居り　愛媛　豊田喜久子
春愁の脱け殻一つ朝の寝間　長崎　川辺酸模
言の葉の森の小道を大岡忌　大分　山本桃潤
【入選】
冷えた風咲けよ咲けよと花辛夷　北海道　高橋真樹子
・咲けよ散れよと？
はだれ野はじれてこがれて暮れなづむ　北海道　芳賀匙子
鳥雲に無音室に入るやうに　北海道　芳賀匙子
春の空遥かな日々を散歩せり　北海道　柳一斉
われひとり千本桜の花の下　宮城　長谷川冬虹
血を吸うて今年の花のあかきこと　宮城　長谷川冬虹
はくれんの今朝ひとときの輝きよ　宮城　長谷川冬虹
斑雪嶺に田の神います出羽の国　秋田　佐藤一郎
魚食うて春はまぶしき怒濤かな　福島　渡辺遊太
休校の畑の菜花のくぐだちて　埼玉　佐々木みほ

・くくだてり

繰り言はぬか床深く春しぐれ　埼玉　佐々木みほ

花ふぶき一変したる世に吹雪く　埼玉　上田雅子

耐へきれぬごとくほぐるる牡丹かな　埼玉　上田雅子

いつの日か百万本の山桜　千葉　若土裕子

筍に地霊の力ずんずんと　千葉　池田祥子

薔薇揺るる黙礼をしてすれ違ふ　東京　岡　惠

春愁のせいにやあらん吹出物　東京　葛西美津子

花散つて野鯉は其の身養へり　東京　市村さよみ

ゴム毬を投げたるやうに春満月　東京　松宮京生子

引越しの荷が動きだす櫻かな　東京　松宮京生子

・荷車のよう?

花に触れ風に触れし手洗ひけり　東京　森凜柚

・触れたる手を洗ふ

椿けさ蜜一滴をこぼしけり　東京　西川遊歩

桜餅雨降れば京思ひだす　東京　長井亜紀

猫の子の何も知らずに泣きにけり　東京　長井亜紀

・ゐたり

風に問ふかつて飾りし雛のこと　東京　長井亜紀

桜咲けど会いたき人に会えぬ春　東京　長尾貴代

春の雪父亡くなりて五十年　東京　長尾貴代

葉ざくらやひこうき雲の彼方へと　東京　楠原正光

・飛行機雲は

草取りが日課でありし母の庭　東京　楠原正光

浅間山白し周りの山笑ふ　東京　堀越としの

花仰ぐ遠きあの日のあの笑顔　東京　堀越としの

葉桜となりて鎮もる向う山　神奈川　遠藤初惠

煮返して卓の真ん中春大根　神奈川　遠藤初惠

藤揺れて募る京への旅心　神奈川　原田みる

辻地蔵の前掛け新た花菜風　神奈川　原田みる

あたたかにあなたの立つてゐたあたり　神奈川　三玉一郎
・に？
花吹雪消えていよいよふぶきけり　神奈川　三玉一郎
春ショールかなしい方の目に涙　神奈川　三玉一郎
・三玉さんの三句、言葉だけにならないように。
落ち合ひて渦になりけり花筏　神奈川　松井恭子
蔦若葉家を一軒ラッピング　神奈川　松井恭子
届きそうなスーパームーン春の月　神奈川　森川ヨシ子
・手の届く
人通り絶えて真昼の桜かな　神奈川　水篠けいこ
飛花落花花眼近眼つのりつつ　神奈川　中丸佳音
待ちくるるあの遅桜まで行かん　神奈川　中丸佳音
海そこまで在りし記憶を松の芯　神奈川　中丸佳音
・そこに
母逝きて故郷遠し桃の花　神奈川　土屋春樹

親猫の子猫の数に惑ひあり　神奈川　湯浅菊子
・惑ひけり
ウイルスの行方おそろし飛花落花　長野　金田伸一
さみだれや他者に打ち寄せ発芽せむ　長野　柚木 紀子
牡丹の夢の中より咲きいでし　岐阜　夏井通江
末法の果ての青空仏生会　愛知　稲垣雄二
土筆一本すなはち妻に摘まれけり　愛知　青沼尾燈子
だぶだぶの学生服や春来たる　愛知　青沼尾燈子
桜散るどの別れより美しく　愛知　服部紀子
天上で待つと告げくる春の雪　愛知　野口優子
今の世に疎開ありけり万愚節　京都　氷室茉胡
・万愚節、この付け、リクツ。
養花天週に三度のテレワーク　京都　氷室茉胡
父の忌の去年もこの道紫木蓮　大阪　古味瑳楓
山笑ふ赤白黒と子犬生れ　大阪　高角みつこ

・この山笑ふもリクツ。　兵庫　髙見正樹

植ゑし人の心の色やチューリップ　大阪　内山薫　ネギ坊主いつかだれかの役にたて　奈良　喜田りえこ

・色に　行春やぐいと襟首掴まれて　奈良　喜田りえこ

車椅子の母の重みや桜坂　大阪　内山薫

花びらに乗りて訪ふ西行庵　大阪　木下洋子　花水木朝の乙女が歌ひ出す　和歌山　玉置陽子

・尋ねん？　畑終へし夫腰かけて夕桜　奈良　田原春

搗きたての草餅一句授かりぬ　大阪　木下洋子　さながらに花曼荼羅や遍路道　岡山　齋藤嘉子

・去年の句ですか？　・？

ひたすらにコロナ籠りや春の月　大阪　澤田美那子　・この季重なり、ダメ。

朝顔の種浸しあり洗面所　大阪　澤田美那子　朝掘の筍マスクの返礼と　香川　丸亀葉七子

姿見のなかゆく飛花と落花かな　大阪　齊藤遼風　・に

閉じ込める小さな夢や紙風船　兵庫　千堂 富子　庵主さま余生を木通の花咲かせ　香川　丸亀葉七子

・を、不要。

閉じ込めて小さな夢を、のびのびと。　天界に挑む雲雀の棒あがり　愛媛　豊田喜久子

春の蝿手足のしどろもどろかな　兵庫　千堂 富子　コロナ禍の街に桜の散る日かな　長崎　百田直代

褒めやればまたさへづれりまた褒めん　兵庫　藤岡美惠子　潮まねきあの夕空を切り取らん　長崎　百田直代

・切り取らん、リクツ、よって不要。

風神のほほゑみ尽きず飛花落花　大分　竹中南行

四月三十日号

【特選】

想ひの丈を尻尾に込めて猫の恋　神奈川　湯浅菊子

吾が手より春の水飲む貰ひ犬　愛知　青沼尾燈子

顔のなき季語となりけり昭和の日　大阪　高角みつこ

新茶汲む人に会わぬをよしとして　大阪　澤田美那子

・決然たるもの。会はぬ？

懸命のたどたどしき字花は葉に　兵庫　藤岡美惠子

この山は大きな楽器春の水　和歌山　玉置陽子

桜湯や笑まふ壽美さん洋さん　岡山　齋藤嘉子

若くつて美しくつて春愁　大分　山本桃潤

犬嫌ひ人間ぎらひ子猫かな　大分　竹中南行

【入選】

雁帰る大日輪のど真ん中　北海道　高橋真樹子

うらうらに日は透け通り鴉の巣　北海道　芳賀匙子

ウイルスと距離測りつつ春深む　宮城　石原夏生

豆の花平気で生きん子規のごと　宮城　長谷川冬虹

・素材多すぎ

花朧汁も膾もウイルス禍　秋田　佐藤一郎

春の街寂し曲がれど曲がれども　福島　渡辺遊太

スーパーの黙の行列田螺鳴く　埼玉　佐々木みほ

紙鍵盤叩く中指風薫る　埼玉　佐々木みほ

星涼し大海原に子亀ただよふ　埼玉　佐藤森恵

・を

青き水深に鯨の立ちてをり　埼玉　佐藤森恵

・てをり、これでは動きなし。

亡き人へま白き飯と花菜漬　埼玉　上田雅子

花水木キッチンカーで来るランチ　千葉　菊地原弘美

今朝開く薔薇の萼を食はれけり　千葉　若土裕子

コロナ禍や地球の子らへ鯉幟　千葉　若土裕子

隼人とは薩摩の良き名柏餅　千葉　池田祥子

ういるすと闘うステージ梅雨に入る　東京　横山直典

・闘ふ

ソーシャルディスタンシング紋白蝶眩し　東京　岡　惠

一輪は早や実となれり二輪草　東京　葛西美津子

・なりぬ

春籠もり腿肉日毎干乾びる　東京　荒木大和

ほたるいか見るべき程の事見しや　東京　市村さよみ

要火急不用の用や蠅生る　東京　市村さよみ

・不要の要不急の急や

孫娘今は蕾の牡丹かな　東京　森徳典

その奥にコロナ後の世や蜃気楼　東京　森凜柚

きらきらのさよりの尖りならべけり　東京　西川遊歩

・きらきらと尖るさよりのならびけり？

赤き点てんたう虫の草の上　東京　楠原正光

・虫が。主格の「の」は特別のときしか使わない。どんなときかは考えてください。

白き小鳥群れ囀るや花辛夷　東京　堀越としの

・言葉多すぎ。

みなしごの蝙蝠泣くや昼の洞　神奈川　越智淳子

天めざし翔びたつばかり花水木　神奈川　遠藤初惠

まるで羽毛うすくれなゐの漆の芽　神奈川　金澤道子

藪を出てくる小綬鶏に子の三羽　神奈川　金澤道子

夏近し雉鳩二羽で来てをりぬ　神奈川　金澤道子

菜の花に囲まれ鴉恍惚に　神奈川　原田みる

・恍惚と

花冷や電話して聞く母の声　神奈川　原田みる

乾坤や来し春がゆくだけのこと　神奈川　三玉一郎

春ゆくや色変へぬまま吉野紙　神奈川　三玉一郎
竹の秋こどもの付けしけもの道　神奈川　山本孝予
敷藁に光のつぶの苺かな　神奈川　松井恭子
空いっぱいジャスミン香り宇宙かな　神奈川　森川ヨシ子

・香る

春キャベツ怒つてないと言つてくれ　神奈川　水篠けいこ
誰がために咲くや躑躅の花盛り　神奈川　水篠けいこ
やさしさにカラスノエンドウからみあふ　神奈川　中丸佳音
風に乗り子供神輿の触れ太鼓　神奈川　土屋春樹

・乗る

春寒や愛する故にいま会はず　神奈川　那珂侑子
風に揺れぶらんこ誰か待つてゐる　新潟　安藤文
ちやんづけで呼ぶ姉なりき雪柳　長野　金田伸一
ウイルス禍キリコの街に春虚ろ　長野　大島一馬

・街の、街は

ウイルス禍桜は遠く離れおり　長野　大島一馬

・をり

琵琶を記憶する種子．人類を記憶する宇宙　長野　柚木紀子

・長すぎる

まっくらな天日ころがす大虹　長野　柚木紀子
鳥はみな人間嫌ひ風光る　岐阜　三好政子
足の裏水神動く春の川　静岡　池ケ谷章吾
コロナ禍に籠れば陰に著我の花　愛知　宗石みずえ

・陰に、不要。

貰ひ犬なにかを喋る日永かな　愛知　青沼尾燈子

・何かいひたき

燕来るミサも自粛の教会に　京都　佐々木まき

・ミサを

やはらかな日差しに太る薔薇の棘　京都　佐々木まき

透け透けの商品棚や四月尽　京都　氷室茉胡

・商品棚を春は行く

こでまりや今朝触れてゆく子らもゐず　大阪　安藤久美

・こでまりに触れてゆく子ら今朝はゐず

円空の鑿をとびちる胡蝶かな　大阪　古味瑳楓

・鑿に

残花かなわれにも一つ恋の詩　大阪　古味瑳楓

花ばかり囁やく街の散歩かな　大阪　山中紅蕎

・街を。この「の」も注意を。

君居らぬことの不思議や豆ご飯　大阪　木下洋子

・君？

新茶の香電波に乗せん近未来　大阪　澤田美那子

春愁や孫と話すもマスクして　大阪　澤田美那子

跡取りの穀雨の中を帰りけり　大阪　齊藤遼風

永き日のコロナウイルスの怒濤　兵庫　加藤百合子

明日からは検査入院卯波立つ　兵庫　千堂富子

袖通すことのなかりし花衣　兵庫　藤岡美惠子

蜘蛛の囲に雨後の水玉朝日さす　兵庫　髙見正樹

人の死を数字で示す春の果　奈良　喜田りえこ

たんぽぽやボール一つでよく遊び　奈良　田原春

でんぐり返り新緑の空に会う　奈良　田原春

・会ふ

愁ひつつふくらませたり紙風船　和歌山　玉置陽子

桜湯や縁の糸ぞおもしろき　岡山　齋藤嘉子

大禍なり遍路道より遍路消え　香川　丸亀葉七子

客ゐない電車かげろふ讃岐富士　香川　丸亀葉七子

吹きたまる花屑遍路の墓とかや　香川　曽根崇

傷痕をよぎる痛みや夕永し　香川　曽根崇

芝桜一島挙げて船迎ふ　愛媛　豊田喜久子

サラリーマン駅に疎らや更衣　愛媛　豊田喜久子

行春をカミユの本と惜しみけり　長崎　川辺酸模

蟻と蟻ある距離とりて春の蟻　長崎　百田直代

・歩みゆく、進みゆく？

五つ六つ茫と浮きたり山桜　熊本　筑紫秋蘭

行く春や隠れ処なきプラネット　熊本　筑紫秋蘭

徒ならぬ一花や牡丹ひらきける　大分　山本桃潤

春愁距離置きて立つことに慣れず　大分　山本桃潤

無防備な吾子の寝顔や春の星　鹿児島　大西朝子

五月十五日号

め紫木蓮日を纏ひ日日変容す　北海道　芳賀佳子

馬ひとつ庭に飼ひたき五月かな　福島　渡辺遊太

・馬をひとつは変。一頭？

混沌の桶より一尾大うなぎ　福島　渡辺遊太

・桶に

考えてもみなかったバナナ洗ひけり　東京　岡　惠

・仮名遣い。

山海空いっぱい映せ白きシャツ　東京　森凛柚

山は富士海は黒潮新茶汲む　東京　神谷宣行

木洩日にまぎれてしまひ道をしへ　神奈川　金澤道子

顛末をしづかに見てる金魚かな　神奈川　三玉一郎

薫風や総身で磨く窓と床　神奈川　松井恭子

投函の手紙に入れる五月富士　神奈川　森川ヨシ子

蝮草に言ひ分のありこちら向く　神奈川　中丸佳音

・に、不要。

春愁の鎧おもたき散歩かな　新潟　安藤文

水切りを教ふる姉貴夏来る　京都　氷室茉胡

取替の効かぬ吾が脳袋角　京都　氷室茉胡

初幟立てたる地球まはりけり　大阪　古味瑳楓

・立てて地球は

新品の冷房の風褒めてをり　大阪　高角みつこ

すりこぎで叩いて開けぬ梅酒瓶　大阪　高角みつこ
・開ける
川底の緑深みて鯉病めり　大阪　山中紅蕎
一本の穴子二人で昼の酒　大阪　齊藤遼風
高層の風に夢のせ鯉幟　兵庫　千堂 富子
薫風や網繕ふも舟の上　香川　曽根崇
憂きことの避けて通れず花茨　愛媛　豊田喜久子
ほたる舟言葉の河に遊びては　大分　山本桃潤
蟻あゆみ蟻たちどまり蟻かしぐ　鹿児島　大西朝子
新車には新車の匂い夏の海　鹿児島　大西朝子
【入選】
叱られてレモンスカッシュ甘いこと　北海道　高橋真樹子
蛹より毛虫より嫌棒のはな　北海道　芳賀佳子
しばし待て汝の安らぎの日の泉　北海道　柳一斉
皇居いまセントラルパーク若葉風　北海道　柳一斉

ウイルスに負けぬ勁さの葉桜よ　宮城　長谷川冬虹
・勁さよ
切通抜ければ桐の花明かり　秋田　佐藤一郎
薫風や故山の奥の奥から来　埼玉　園田靖彦
著我の花茂る近道とおりやんせ　埼玉　佐々木みほ
・とほりやんせ
滝壷や輪廻転生あるごとし　埼玉　佐藤森恵
白玉や人は会ふべし話すべし　埼玉　上田雅子
・人に会ひたく話したく
指ながき母の結びし粽かな　埼玉　上田雅子
病室に太平洋の五月波　千葉　若土裕子
・病室へ
メモ添へし桶に溢るる石竹よ　千葉　池田祥子
・へて
ひたすらに蕗剥く歳となりにけり　千葉　池田祥子

・りてゐき　東京　堀越としの

天空の庭より高く夏燕　東京　稲垣京子

目標は卯の花垣や夜の散歩　東京　岡　惠

・卯の花垣よ

自転車に乗る度に見ゆ桐の花　東京　岡　惠

此の風を待つてゐたのだ夏近し　東京　市村さよみ

お神楽に乗って舞い散る楠落葉　東京　森徳典

・ひ

蟄居して妻と二人で初鰹　東京　森徳典

・二人の

窓の外へカーテンなびき五月来る　東京　森凜柚

直ぐ死なず居ついてしまふ金魚かな　東京　西川遊歩

豆の花また豆の花紀尾井町　東京　長井亜紀

母眠り静かになりて羽蟻飛ぶ　東京　長尾貴代

このシャツも何年目かと更衣　東京　楠原正光

蟻の列離るるもゐて何処まで　東京　堀越としの

鴉一羽翼もつれり青嵐　神奈川　越智淳子

・もつれり、は変。

横須賀線客は新樹の光のみ　神奈川　遠藤初惠

たんぽぽや齢百余の犬散歩　神奈川　遠藤初惠

てのひらに受く木洩日と山清水　神奈川　金澤道子

・受くる木漏れ日。と、を入れるのが散文精神。

木の花の匂ひ重たし道をしへ　神奈川　金澤道子

夫にも花束もらふ母の日よ　神奈川　原田みる

・夫からもらったのか、夫ももらったのか、これでは不明。

百合の花一日かけてひらきけり　神奈川　三玉一郎

尻れば花びらたたみ芥子の花　神奈川　山本孝予

一滴の香油の水輪夏来る　神奈川　松井恭子

・香油に

コロナ禍や子供が炊いた豆の飯　神奈川　水篠けいこ

牡丹揺る牡丹色なるうれしさに　神奈川　中丸佳音
花冷えや斎屋（ゆーや）の湯煙揺れ捩じれ神奈川　神奈川　土屋春樹
麻酔覚め初夏の陽射しに番茉莉　神奈川　土屋春樹
今も尚牛の代掻き千枚田　神奈川　土屋春樹
・牛が代掻く
母の日やはれて繋がるオンライン　神奈川　那珂侑子
ざつくりと盛つて蛸豆ごはんかな　神奈川　那珂侑子
・蛸豆とは？
玉虫を拾つてみなに見せびらかす　神奈川　那珂侑子
健啖の妻ありがたや夏料理　長野　金田伸一
雨一夜嵩増す山の若葉かな　長野　大島一馬
夏近し空みるみるうちに海　長野　柚木　紀子
薔薇五月いじわるな人笑ひけり　岐阜　夏井通江
・いぢ
その男薔薇の刺繍のマスクして　岐阜　夏井通江

雨蛙とふいにぶつかるひんやりす　岐阜　夏井通江
院回る楠の大樹のこの若葉　岐阜　三好政子
消閑や夏川に亀釣る男　岐阜　三好政子
どんぐりになりたき孫と柏餅　愛知　稲垣雄二
・と？　煮え切らない態度の表明みたいなもの。
少年期茂りに怯へ終りけり　愛知　稲垣雄二
門灯の蚊柱構はず通りあれ　愛知　臼杵政治
いにしへの神を寿ぎ和布刈る　愛知　青沼尾燈子
田螺鳴く迦陵頻伽を祖と恋ひて　愛知　服部紀子
・茂吉の歌のなぞり？
新樹道ゆくや足音まで緑　愛知　服部紀子
日常に折目ありけり更衣　京都　佐々木まき
青嵐心揺さぶる毒舌も　京都　氷室茉胡
閉店をドアにお知らせ花樗　大阪　古味瑳楓

なにがしはまこと姦し薔薇の園　大阪　古味瑳楓

西瓜切るほどの暑さのはや来たる　大阪　山中紅蕘

あたふたとスカイプ始む五月かな　大阪　木下洋子

恐る恐る跳んで飛べたり燕の子　大阪　木下洋子

新コロナなど知らぬ夫よ初鰹　大阪　澤田美那子

・など、不要。

筍を茹でて狸の背のごとし　兵庫　加藤百合子

完成のパパのぶらんこおそるおそる　兵庫　藤岡美惠子

飛沫上げ網曳く漁船青嵐　兵庫　髙見正樹

鮎に串陽のあるうちの冷やし酒　奈良　喜田りえこ

セールスの髪のくろぐろ夏来る　奈良　田原春

夏シャツの口尖らしてドッジボール　奈良　田原春

トラクター代田の泥を県道へ　奈良　田原春

われも又黒潮の子初鰹　和歌山　玉置陽子

・子よ　梅檀の花や久女の空深く　岡山　齋藤嘉子

蚕豆を炒りてころがす掌　香川　丸亀葉七子

伸びあがり踊るがごとし胡瓜苗　香川　曽根崇

家中にひびく泣き声初端午　香川　曽根崇

麦笛を吹く前線の医師団へ　長崎　百田直代

片蔭り共に暮らして五十年　大分　山本桃潤

ふりふりと泳ぐ金魚や離縁状　鹿児島　大西朝子

五月三十一日号

【特選】

め朴の花透かしてみまゆ高天原　北海道　高橋真樹子

母の日や母が私を忘れても　東京　森凜柚

ありつたけ摘んで名残の豆ご飯　神奈川　松井恭子

さむがりの目高一匹鉢の底　神奈川　那珂侑子

昼間から頭に浮かぶビールかな　新潟　安藤文

今生の句集ものさん玉の汗　長野　金田伸一

春眠や醒めて体を組立てる　静岡　池ケ谷章吾
岩とても老ゆるこの世に更衣　愛知　稲垣雄二
岩孤独人も孤独や新茶汲む　愛知　稲垣雄二
元を取れぬものに子育て茄子の苗　愛知　宗石みずえ
・元を取らぬ？
窓放ち聞かむ新樹の大笑ひ　愛知　青沼尾燈子
寝そべれば腹のよく鳴る五月かな　大阪　高角みつこ
箱庭や去年がとうに懐かしき　大阪　高角みつこ
・はやも
ふるさとの早苗吹かれて歌ふごと　大阪　木下洋子
・歌ひけり。なぜ「ごと」というのか、考えること。
恐る恐る自粛解除や冷奴　大阪　木下洋子
水の嵩ふゆる近江や夏つばめ　大阪　齊藤遼風
・を。この「や」命とり。
帰省なく上京もなきマスクかな　大阪　齊藤遼風

竹の子やこころを留守にしたる間に　兵庫　加藤百合子
南風や電波を恃む人と人　兵庫　加藤百合子
蒸しあげて身は白銀の鱸かな　奈良　喜田りえこ
粘りよき泥が自慢の植田かな　和歌山　玉置陽子
もてあそぶ音の涼しき花鋏　愛媛　豊田喜久子
昼寝さめ疫禍の国へ戻りけり　長崎　川辺酸模
担がれて蝶の骨ゆく夏野かな　長崎　川辺酸模
花石榴群れず叫ばず触れ合はず　長崎　百田直代

【入選】

ほおほおと人の眠りへ青葉木菟　北海道　芳賀匙子
青空を菜としたる籐寝椅子　北海道　柳一斉
日に三度朝ドラを見て昼寝かな　宮城　石原夏生
葉桜よ百まで生きん母の背　宮城　長谷川冬虹
・背、不要？
地球ごと草臥れてゐる聖五月　秋田　佐藤一郎

・聖不要。安易につけるなかれ。　岡　惠

老いぼれの蟻の見てゐる蟻の列　東京　葛西美津子

初蛍拍手をもって迎へらる　東京　市村さよみ

風は香に青山椒の切通し

スカイツリー青く点して梅雨入かな　東京　森凜柚

・梅雨に入る

籐椅子を揺らし淋しき音を聞く　埼玉　上田雅子

螺子巻の柱時計や梅雨に入る　千葉　若土裕子

・も

吾が朝の寂しからずや囀れり　千葉　水町ゆの

涼しさを剪りて一本白あやめ　千葉　池田祥子

老鶯の囃子高らか田を植うる　千葉　池田祥子

ホタホタとニセアカシヤは花落とし　東京　横山直典

・落とす

露草の今年の蕾まだ蕾　東京　岡　惠

ドアノブに天道虫の来てをりぬ　東京　岡　惠

筍もそろそろ終はり寸胴鍋　東京　葛西美津子

水中花塩ビ間仕切り翻り　東京　市村さよみ

・飜る

幸せも不幸もはじけソーダ水　東京　森凜柚

・並列、安易。

食べ頃をメモして贈るメロンかな　東京　森凜柚

かぐはしき樟の若葉や天つ宮　東京　西川遊歩

水替へてプール不敵な面構え　東京　西川遊歩

なんでやねんこの世不条理長命縷　東京　西川遊歩

薬害の私もリセット夏椿　東京　長尾貴代

それぞれに産地の札や花菖蒲　東京　楠原正光

・生国の札

飛魚や高速船を追ひ越して　東京　楠原正光

山小屋を去る新緑に送られて　神奈川　伊藤靖子

思ひ出す旅のあれこれ更衣　神奈川　原田みる
夏蝶が自由に出入りするこころ　神奈川　三玉一郎
平凡な暮らし尊し青田風　神奈川　山本孝予
柿の花ぽろぽろ散りぬ塀の外　神奈川　山本孝予
茄子漬の床かき混ぜる夕餉かな　神奈川　森川ヨシ子
スカイプのわが顔卯の花腐しかな　神奈川　水篠けいこ
ピアノと語りピアノ弾く人リラの花　神奈川　中丸佳音
執着の薄るもさみし葦あをし　神奈川　中丸佳音
・青葦原
水盤は目高の宇宙泳ぎけり　神奈川　湯浅菊子
這ひ上がる山霧速き山つつじ　新潟　高橋慧
夏三日月肩胛骨さゆう搾り　長野　柚木　紀子
こるゐもなし一花多果これ「蓮の徳」　長野　柚木　紀子
わが庭の雨蛙鳴く今日祝ぎて　岐阜　夏井通江
ころぶときスローモーションヒメヂョヲン　岐阜　夏井通江

代掻きや水路縦横美濃日和　岐阜　夏井通江
入浴を五分短く夏時間　岐阜　三好政子
何あらむ燕のゐない燕の巣　愛知　三好政子
丸刈りや初夏の子の頬光る　愛知　臼杵政治
白い雲帰還困難地や田植ゑ　愛知　青沼尾燈子
・雲白き、　愛知　服部紀子
雨蛙何を告げんと今日も鳴く　愛知　野口優子
どくだみの花越えてきし風ならん　京都　佐々木まき
言ひにくきことを夫に新茶汲む　京都　氷室茉胡
・言ひにくきことを言ふ妻？　京都　氷室茉胡
雷や子を宥めつつテレワーク　大阪　安藤久美
ゆさゆさと大神の幣夏に入る　大阪　安藤久美
ぽんぽんと茅花流しをゆく船か　大阪　安藤久美
としどしの歩幅せばまる蛇苺　大阪　古味瑳楓

・年々に
香水を纏ひてからの後悔も　大阪　高角みつこ
四十分待たされてゐる薄暑かな　大阪　内山薫
ひとり居にたそがれながき五月かな　大阪　内山薫
・ひとり居の
面会のかなはぬ日々の昼寝かな　大阪　内山薫
・日々は
ややうしろめたき曲線水茄子　大阪　澤田美那子
・はっきりいったほうがいい。
田には水蝌蚪に足ある嬉しさよ　大阪　齊藤遼風
籠りたる日々の分まで初夏の光　兵庫　加藤百合子
モノクロのやうな暮らしや更衣　兵庫　千堂　富子
・やうな、不要。
大空にハート描きて草矢射る　兵庫　千堂　富子
白玉はしばし口にて遊ぶもの　兵庫　藤岡美恵子

これ以上はと言はんばかりの牡丹かな　兵庫　藤岡美恵子
夏暁の散歩にマスク疫病禍　兵庫　髙見　正樹
覆われて消えし近道草いきれ　兵庫　髙見　正樹
・覆はれて
あいなめの男振りよきえらの張り　奈良　喜田りえこ
薄暑光理科室に彼の口笛　奈良　田原春
・上五、再考。
後もどりできぬ道あり蟻の昼　和歌山　玉置陽子
・蟻では理屈。
夏潮やアサギマダラの旅はるか　岡山　齋藤嘉子
・夏潮、理屈。
飼ひ殺しのことばありけり山椒魚　岡山　齋藤嘉子
・といふ、けり、不要。
ひさかたの夕焼野電車ひた走る　香川　丸亀葉七子
著我なだれ大きな滝となるところ　香川　曽根崇

初花のいちはつに雨音もなく　香川　曽根崇

・し　　長崎　川辺酸模

さやさやと畳過ぎりし蜈蚣かな

・を過ぎる　　長崎　百田直代

蚕豆を爽ごと焼いて青き味　　熊本　筑紫秋蘭

屋台酒まかり出たる夏の月　　大分　山本桃潤

七七と発句に付ける心太　　大分　山本桃潤

教師らよ麦笛くらい吹きてみよ　　大分　竹中南行

月の竹残りの皮も脱ぎにけり　　鹿児島　大西朝子

妹のショートカットや夏来る

六月十五日号

【特選】

谷翔くる鬼のまぼろしほととぎす　　福島　渡辺遊太

産土の夜ごと降らすや栗の花　　埼玉　佐々木みほ

たいくつはのつぺらぼうやマスクして　　埼玉　上田雅子

・たいくつなのつぺらぼうのマスクかな。原句は散文、しかもごちゃごちゃ。　　東京　森徳典

黒南風やマスク外して深呼吸　　東京　森凜柚

・白南風や

掬ふたび光溢るるゼリーかな　　東京　森凜柚

炎熱や記憶頼りに歩く道　　東京　西川遊歩

バロックの審美の金魚ひるがへる

・耽美の

夏座敷たれをらずとも懐かしき　　神奈川　越智淳子

・なつかしく

素早さの尻尾に流る蜥蜴かな　　神奈川　越智淳子

・尾へと流るる

軽鳧の子の川の広さをまだ知らず　　神奈川　金澤道子

・は

梅雨晴や鳩も白雲見てゐるか　　神奈川　原田みる

黒揚羽影から生まれ影と消ゆ　神奈川　中丸佳音

ひとつずつ花の名忘れ晩夏光　新潟　高橋慧

荒梅雨や雲の内なる山の音　長野　大島一馬

わだつみの深海水芭蕉方のゆらゆら　長野　柚木 紀子

ふと見れば夫は老人柿の花　岐阜　夏井通江

金魚玉金魚虚空に遊ぶかな　愛知　稲垣雄二

鮫鰊の心がわかる鯰かな　愛知　青沼尾燈子

質問なき学生ばかり日の盛り　京都　氷室茉胡

蝶の口いのちの水を一身に　大阪　安藤久美

・ひとすぢに

つまらなき予報通りの梅雨入りかな　大阪　高角みつこ

我がために母生きむとす額の花　大阪　内山薫

玉葱を吊り厄除けの我が家かな　大阪　木下洋子

・吊る。吊り、は散文。

七十の浅知恵育て夕端居　奈良　喜田りえこ

・育つ。育て、は自分にとらわれている。育つ、は自分を眺める。

中空を揺れつつ上る大毛虫　奈良　田原春

したたるやかんばせうづめ桃食らふ　岡山　齋藤嘉子

アッパッパ痩の止まらぬ副作用　香川　丸亀葉七子

朝顔や今朝濡れ縁の賑はしき　香川　曽根崇

我もまたアジアの民よサングラス　長崎　川辺酸模

谷川の巌にすずむ蝮かな　長崎　川辺酸模

大茅の輪地球丸ごと通さんと　大分　山本桃潤

父の日や父の椅子には父座る　鹿児島　大西朝子

初蛍山河は闇を惜しまざり　鹿児島　大西朝子

・惜しみなく

【入選】

白樺の肌剥くやうな蝉の声　北海道　高橋真樹子

新緑の朝日に放つ牧の駒　北海道　柳一斉

たまに有る原稿依頼鰻食ふ　岩手　川村杳平

新幹線十分ほどの麦の秋　宮城　石原夏生
ハブのごと鋭き力言の葉に　宮城　長谷川冬虹
・ごと、不要。
酔ふほどに言の葉熱きハブ酒かな　宮城　長谷川冬虹
県境を越えぬ分別かたつむり　秋田　佐藤一郎
おさらばの覚悟ふところ更衣　福島　渡辺遊太
馬鈴薯の花よつつましき孤高　福島　渡辺遊太
たちまちに玉のごとくに蛭ふくる　埼玉　園田靖彦
蝸牛たしかに皮膚をかじりをり　埼玉　佐藤森恵
投げ入れし紫陽花のまだ濡れてをり　埼玉　上田雅子
ひと部屋の畳嬉しき素足かな　埼玉　上田雅子
仕込まれて蔵に微睡む実梅かな　埼玉　藤倉桂
・瓶に、でよい。
集ひたや更衣して紅差して　埼玉　藤倉桂
天空は疫禍の外や夏燕　千葉　若土裕子
・天空や疫禍の外を
初すいか誕生日にと決めてゐし　千葉　若土裕子
薫風やほお叩きゆくはっとする　千葉　水町ゆの
・はつと
二つ忘れ一つ覚ゆる涼しさよ　千葉　池田祥子
引き継がぬ父祖の地のもの青嵐　千葉　池田祥子
柿若葉手には重たき志野の椀　千葉　麻生十三
鬱の国青黴愛でて火酒飲まん　千葉　麻生十三
・愛でん
黒部は夏薬師見平は神の庭　東京　稲垣京子
・は、不要。
求愛の光抱きしめ蛍飛ぶ　東京　稲垣京子
考へつまた考へつ夏三更　東京　横山直典
芍薬の三花現在過去未来　東京　岡惠
枇杷の木の闇おそろしき端居かな　東京　葛西美津子

木下闇選ばなかった道ありき　東京　市村さよみ

・つ

何時からか枝折戸塞ぐ蜘蛛の糸　東京　森徳典

紫陽花の露煌めきぬ自粛明け　東京　森徳典

故郷に近づく電車青田風　東京　森凜柚

なめくぢりあの世この世を思ふまま　東京　神谷宣行

・思ふまま、再考。

爪先で雨の音聴くあめんぼう　東京　西川遊歩

追悼号開きしままや夕端居　東京　西川遊歩

西の堀東の堀が夏柳　東京　長井亜紀

・や

青芝にマスクはずして転がれり　東京　長井亜紀

・転がれりマスク外して青芝に

おにぎりをみなでほほばる田植かな　東京　楠原正光

あぢさゐやいつもの朝の庭いぢり　東京　楠原正光

梅雨寒に「ペスト」購ひ座りをり　東京　堀越としの

コロナ禍や夜濯ぎ見守る妻の星　東京　櫻井滋

アラートの鬼火を消して梅雨入りかな　東京　櫻井滋

・鬼火ともれる、現実はどうでもよい。どう描くか。

再開のカフェで早速レモネード　神奈川　伊藤靖子

危ないぞ車道に降りる鴉の子　神奈川　越智淳子

県道を毛虫一匹渡り切り　神奈川　遠藤初恵

・る

遠山も一品となし夏料理　神奈川　遠藤初恵

・であり

大瑠璃の声や釈迦堂切通　神奈川　金澤道子

三線を心で鳴らす沖縄忌　神奈川　三玉一郎

青々と匂ふ茅の輪をくぐりけり　神奈川　山本孝予

遠目にも寝息すこやか蛇の腹　神奈川　松井恭子

思ひのほかコロナ疲れの髪洗ふ　神奈川　松井恭子

亡き人の本の傍線夏深し　神奈川　中丸佳音　われを見て鳥の逃げ行く青き空　岐阜　夏井通江

船虫の一匹たりと逆らはず　神奈川　湯浅菊子　今衣脱ぎをる蛇のあを光り　岐阜　古田之子

七つまで目高数へてあとは無理　神奈川　那珂侑子　・青光る

食卓にめだか三匹飼ふ女　神奈川　那珂侑子　ジャズききて後のさびしさ月見草　岐阜　古田之子

北国の夕暮れ長し針槐　神奈川　服部尚子　朝はまづ金魚の数確かめる　岐阜　三好政子

情熱の母のピアノや薫る風　新潟　安藤文　・数を確かめて

熱々のカレーほおばり梅雨に入る　新潟　安藤文　図書館へ梧桐の並木抜けて行く　岐阜　三好政子

蟻一匹何処より来て何方へ　新潟　高橋慧　納豆の糸引き光る走り梅雨　静岡　池ケ谷章吾

飄々とあり父の遺せし夏帽子　新潟　高橋慧　・引き光る走り、うるさし。

清清しき白山一列の葱坊主　石川　花井淳　容赦なく水古びゆく清水かな　愛知　稲垣雄二

・一列に　・上五、再考。

焼酎をかさぬるホ句の夜なべかな　長野　金田伸一　夢を見てまた夢の世に昼寝覚　愛知　稲垣雄二

郭公の遠啼く四時に覚めにけり　長野　金田伸一　・へ

五月豪華絢爛火と人と愛と死と　長野　柚木紀子　飲み会の画面に頒くる鮑かな　愛知　臼杵政治

一瞬永遠いまし天窮はつなつ　長野　柚木紀子　この辺り十枚あらむ田植かな　愛知　宗石みずえ

俎板に此方を睨む大鯰　愛知　青沼尾燈子
我が生徒達いつか泉を探しに行こう　愛知　服部紀子
・リズムととのえる。ほかの二句も。
釈迦堂の借巣に今日も燕の子　愛知　野口優子
夫との温度差さらに梅雨籠　京都　氷室茉胡
出来ちやつたと子から報告青嵐　京都　氷室茉胡
古団扇いつしか主に似てきたり　大阪　安藤久美
砑らは木暮の谷をさまよへり　大阪　安藤久美
避暑ならば富士屋ホテルに一度でも　大阪　高角みつこ
早苗田や心解ける水の色　大阪　山中紅蕘
外は夏手と手を合はすガラス越し　大阪　内山薫
コロナ禍やピンクのマスクの青年医　大阪　内山薫
・ピンクのマスク青年医
パソコンを使ひこなさんさくらんぼ　大阪　木下洋子
ひそやかにマスクを外す薔薇の前　大阪　木下洋子
あぢさゐに雨の一夜の重さかな　大阪　澤田美那子
・重さあり、この、かな、ダメ。
蛍火や母の背中のうすきこと　大阪　齊藤遼風
慕ひ来る蚊の払へども払へども　兵庫　加藤百合子
・慕ひ寄る蚊を
我が影やじっと動かぬ山椒魚　兵庫　千堂富子
・我が影にじつと動かず
夏つばめ電線のなき坂の街　兵庫　千堂富子
寄り添ふもかなはぬ日々よさくらんぼ　兵庫　藤岡美惠子
百合の木や葉裏を返す風一陣　兵庫　髙見正樹
・裏、不要。
長梅雨や傘携えて朝歩き　兵庫　髙見正樹
てやんでえウィズコロナたあ鰻食ふ　奈良　喜田りえこ
麗しのアジアの空の田植かな　奈良　喜田りえこ
みほとりのものみな白し五月雨　和歌山　玉置陽子

田の角の掌ほどを植ゑにけり　和歌山　玉置陽子

梅雨蝶やかくれたきりのかくれんぼ　和歌山　玉置陽子

瓜しやぶる少なき歯もて婆赤子　岡山　齋藤嘉子

葉がくれに桃もぐ人か朝まだき　岡山　齋藤嘉子

梅雨晴間乱舞のもんしろ蝶々かな　香川　丸亀葉七子

なぜか好き雨の中なる山帽子　香川　丸亀葉七子

草かげろふ　風のそよぎに　逆らはず　香川　元屋奈那子

・一字あき、不要。

自家用の新茶給はる縁の先　香川　曽根崇

著我咲くや西行谷に水の音　香川　曽根崇

・を

一鉢のパセリをりをり摘む朝餉　愛媛　豊田喜久子

あぢさゐや放置自転車錆すすむ　福岡　北井乃峰子

ながらへてアジアの果てに夕涼み　長崎　川辺酸模

・上五、再考。

ほうたるや闇に穴あけ何を見ん　長崎　百田直代

行きわびて昼餉の目刺し梅雨くらし　熊本　筑紫秋蘭

麦の秋父が姉貴とよぶ媚　大分　山本桃潤

青き地球青きあじさい咲きにけり　鹿児島　大西朝子

六月三十日号

【特選】

草矢打つ遙かなる的胸に秘め　東京　西川遊歩

明日ひらく花の香りや大夕焼　東京　長井亜紀

ちさき子のマスクかわゆし夏帽子　神奈川　伊藤靖子

箱庭に釣人ひとり来てをりぬ　神奈川　金澤道子

まだ父に辿り着かない帰省かな　神奈川　三玉一郎

二つ三つ茅の輪をくぐる念のため　大阪　澤田美那子

・念のため二つ三つくぐる茅の輪かな

マスク外せばこんなにも草いきれ　兵庫　加藤百合子

旅は良し家はなほよし青簾　愛媛　豊田喜久子

睡蓮や収まりつかぬ昼の酒　大分　山本桃潤

【入選】

この国をいつでも捨てむ更衣　北海道　柳一斉

・大げさか。

夏空やこころ遠くへ旅したる　北海道　柳一斉

・旅をして

朝焼けやカップ片手に庭に立つ　宮城　大内美保

・カップ？

かの日から陰画のままや夏の海　福島　渡辺遊太

ほととぎす闇に生まれて闇に消ゆ　福島　渡辺遊太

茹で上がるやうな人体田草取　埼玉　園田靖彦

朝焼の海に向へる子亀あり　埼玉　佐藤森恵

・向かひて子亀歩む

巣立鳥見てゐる私と野良猫　埼玉　佐藤森恵

コロナ禍に生まれし恋や氷水　埼玉　藤倉桂

友の中若きわれありさくらんぼ　千葉　菊地原弘美

・中に

白玉やそろそろ母が着くころと　千葉　若土裕子

・ころか

掌にずしり玉の赤子の髪洗う　千葉　池田祥子

母の日や妣のかなしき日をおもふ　千葉　麻生十三

梅雨寒や母には見せぬ死亡欄　東京　永井奈緒

夏の別れ怒りの電話そっと置き　東京　永井奈緒

・そっと置く

夏茱萸の渋味を好む人と棲む　東京　荒木大和

花南瓜長生きといふ寂しさに　東京　神谷宣行

梅雨晴や大星雲の渦を見る　東京　神谷宣行

・見ゆる

庭のもの刻んで香る冷奴　東京　長井亜紀

梅雨寒や爆音上げるオートバイ　東京　楠原正光

・あげて

雨やみて二頭のアゲハ夫を呼ぶ　東京　堀越としの

梅雨明けや列島丸ごと換気せん　東京　櫻井滋

飛び石を踏み外したき藻の花よ　神奈川　越智淳子

・外したる花藻かな

マスク外し百合の匂ひを確かめる　神奈川　遠藤初惠

・確かめよ

虫干やもう使はぬと思ひつつ　神奈川　金澤道子

梅雨晴やマスクを外す上り坂　神奈川　原田

茅の輪から別のあなたが出てきたり　神奈川　三玉一郎

愛されて愛し返して汗の中　神奈川　三玉一郎

・しぬ

夏の朝天を見上げて犬静か　神奈川　山本孝予

愛犬とさいごの対話柿若葉　神奈川　山本孝予

さくらんぼ半年会はぬ母よ娘よ　神奈川　松井恭子

ほうたるや付かず離れず夫婦なり　神奈川　松井恭子

・たり

電話中夏鶯のこだまかな　神奈川　森川ヨシ子

・こだまして夏鶯や電話中

弓なりの日本列島梅雨に入る　神奈川　水篠けいこ

楊梅の煮ゆる匂ひにひとりなる　神奈川　中丸佳音

・をり

松の枝に明恵上人下に蝦蟇　神奈川　湯浅菊子

冷酒や詩嚢たがやし句を作る　新潟　安藤文

花いばら咲き満ちており登山口　新潟　高橋慧

散り敷きて星のかけらかえごの花　新潟　高橋慧

一本の蒲公英を挿すモーニング　石川　花井淳

手取川向かふの山も滴るる　石川　花井淳

・れり

あの日から海・人哭くや沖縄忌　山梨　小泉雅恵

なめくぢりすつとんきような顔をして　岐阜　夏井通江
更衣きのみきのまま生きてみたし　愛知　野口優子
切り抜きのレシピも古し梅酒漬け　大阪　高角みつこ
・古き梅酒かな
いきてゐることがかなしみ水中花　大阪　内山薫
気がつけば疫病神も端居かな　大阪　木下洋子
・疫病神と
この年の祭なくとも祭鱧　大阪　木下洋子
甚平やあつといふ間ぞ十年は　大阪　澤田美那子
父の日や釘真つ直ぐに打ち込みし　兵庫　千堂 亀子
獣かな茂りに音が遠ざかる　兵庫　髙見正樹
・獣かも
柔らかな大き掌楸邨忌　奈良　喜田りえこ
・柔らかに？
沖縄忌今も空には戦闘機　奈良　喜田りえこ

・空ゆく
ひとすぢの紐となりたり蛇の衣　和歌山　玉置陽子
たらちねの乳房のごとく桃すする　岡山　齋藤嘉子
・ごとく、不要。
夏椿今年もとどく縁しあり　広島　三好芳枝
太郎次郎三郎川の名ぞ涼し　香川　丸亀葉七子
・太郎次郎川の名涼し三郎も
灸の火網戸の風にあおられぬ　香川　丸亀葉七子
・るる
朝涼や牧にたまはる山羊の乳　香川　曽根崇
白峯の御霊鎮もる大緑陰　香川　曽根崇
只事句作つては捨つ蛇の衣　長崎　百田直代
億年のかなたの微光苔の花　大分　竹中南行
・かなたへ
火葬場の高き煙突梅雨晴間　鹿児島　大西朝子

七月十五日号

【特選】

ウポポイや言祝ぐやうに樺の花　北海道　高橋真樹子

深閑と留守か居留守か蟻地獄　福島　渡辺遊太

家といふものの儚く出水かな　千葉　麻生十三

大降りを喜ぶ蓮の広葉かな　神奈川　金澤道子

草取りて空つぽになる頭かな　神奈川　原田みる

花野行くわれは学生大雪山　神奈川　伊藤靖子

滑り台すべる子鴉未恐ろし　神奈川　那珂侑子

昼寝覚やつと我が家に辿り着く　神奈川　那珂侑子

雨戸開く音を覚えし目高かな　神奈川　那珂侑子

存外に不愛想なる目高飼ふ　石川　岩本展乎

呼ぶ声のまだ遠かりし昼寝覚　愛知　野口優子

草原を過ぎる揚羽の思ふこと　大阪　山中紅蕘

雷や鴟尾の隔つる西東　奈良　喜田りえこ

炎天へ腹かつさばく鰯かな　奈良　喜田りえこ

今生の紅来世の白蓮花　奈良　広島　三好芳枝

ひきこもる一人暮らしに咲く風蘭　広島　香川　曽根崇

鯉の背を目高の群の流れゆく　香川　長崎　百田直代

したたかに生きてしわしわソーダ水

【入選】

廃坑にかの世のこゑや青嵐　北海道　高橋真樹子

あを鳩の阿呆阿呆と囃しよる　北海道　芳賀匙子

水無月の水輪奏づるシンフォニー　北海道　柳一斉

・水無月（今の七月）の語感、確認を。

木槿咲く嫁は隣りの娘とや　埼玉　佐藤一郎

音のなく雲移りゆく植田かな　北海道　柳一斉

オンライン授業を加へ夏期講座　岩手　川村杳平

・ご報告で終わらないように。とくにほかの二句。

手の中で逝く鳥哀れ走り梅雨　宮城　大内美保

読書てふ果てなき旅路雲の峰　宮城　長谷川冬虹

タワービル崩るるごとく昼寝覚　福島　渡辺遊太

犬死せり我が手に暑き尿置いて　福島　渡辺遊太

・熱き

決断は秘してもらさず心太　埼玉　園田靖彦

・何か不明。

新しき読み手現はれ一茶の忌　埼玉　佐藤森恵

荒梅雨や画面流るる泥の川　埼玉　上田雅子

巻貝は波の形見よ夏の雲　埼玉　上田雅子

てふてふと見紛ふ産着麻の花　千葉　菊地原弘美

・麻の花、余計。

はやばやと父母の座にゐる霊迎　千葉　若土裕子

・座にあり

生き延びし特攻の叔父海紅豆　千葉　池田祥子

・海紅紅、ありきたり。

亡き姉の泰山木や花咲けり　東京　永井奈緒

警備員赤子のやうな昼寝かな　東京　岡田栄美

入院の荷に加へたし竹婦人　東京　長井亜紀

夕立や土をたたゐて日の匂　東京　楠原正光

今朝の卓友の梅ジャム加はりて　東京　堀越としの

・加へけり。主体として生きているかの問題。

新茶汲む味や香りや口々に　東京　堀越としの

これがまあ首都の選挙か梅雨じめり　東京　櫻井滋

コロナ禍や扇とぢたり広げたり　東京　櫻井滋

南風時化や船噛む波もシナの海　東京　横山直典

梅雨寒やホットコーヒー焙煎で　東京　森徳典

草の虫しづかに眠る梅雨滂沱　東京　神谷宣行

・眠れ

向日葵は蕾そろひて待つ炎天　神奈川　伊藤靖子

受診待つ緑に雨の降る見つつ　神奈川　伊藤靖子
とりあへず待てぬ男に冷奴　神奈川　遠藤初恵
梅雨寒や午後に少しの眠りぐせ　神奈川　遠藤初恵
首里城は焼け落ちしまま花梯梧　神奈川　金澤道子
・花梯梧、付きすぎでしょう。
我もまた訝しきもの鴉の子　神奈川　金澤道子
もう秋の声しかしない喉仏　神奈川　三玉一郎
夏帽子去年の夏が箱の中　神奈川　三玉一郎
向日葵や引き潮に道あらはるる　神奈川　松井恭子
蟹の背に蟹重なりて蟹転ぶ　神奈川　水篠けいこ
半夏生草咲く仮の世にゐるような　神奈川　中丸佳音
河鹿啼き夕餉が迫る山の宿　神奈川　土屋春樹
捨て畑に地力みなぎる竹煮草　神奈川　湯浅菊子
万緑といへども緑とりどりに　神奈川　服部尚子
・季語の解説、しなくていい。

東京をつつむ憂鬱朔太郎忌　新潟　安藤文
・朔太郎忌、付きすぎ。
流されしマスクぽつんと出水かな　新潟　安藤文
・ぽつんと、マスクの感じしない。
五月雨に甲斐は遠けれ道祖神　石川　花井淳
・五月雨の甲斐は遠しと
梔子の香や音立てて夕刊来　石川　花井淳
情熱の嵐再び冷奴　石川　花井淳
・再び、中途半端。
荒梅雨や山川すべて膨潤す　長野　大島一馬
・季語の解説、不要。
兄貴ら「内向の世代」啼けぶつぽふそう　長野　柚木 紀子
収穫せし辣韮ひとつづつ洗ふ　岐阜　夏井通江
夫つくりし辣韮漬けなり配りけり　岐阜　夏井通江
濁流の削る崖烏瓜の花　岐阜　古田之子

金蛇の清き姿や山がれ地　岐阜　古田之子
大出水人新世を我等生く　岐阜　三好政子
恋心閉じ込めてあり花氷　岐阜　梅田恵美子
風景画ところどころに木下闇　静岡　池ケ谷章吾
・ところどころ、無駄。
脳味噌を開きにしたや梅雨晴間　静岡　池ケ谷章吾
梅雨出水のすべてを呑んで海静か　愛知　稲垣雄二
・上五、理屈。
出水後蝶の水飲む泥地獄　愛知　稲垣雄二
・同然。
ごきぶりもウィルスもゐて地球かな　愛知　臼杵政治
気立てよし化粧やゝ濃し花カンナ　愛知　宗石みずえ
夏草は死者を悼みて戦ぎをり　愛知　青沼尾燈子
寝床にて昔を思ふ梅雨の音　愛知　青沼尾燈子
咲く花と落ちる花あり白木槿　三重　乾　薫

雨あがり白き木槿に蜂来る　三重　乾　薫
晩学も時には蓮の浮葉かな　京都　佐々木まき
兄の夢弟の夢熱帯魚　京都　佐々木まき
これこれと母に団扇で叱られし　京都　佐々木まき
戻りたくなき現世や昼寝覚　京都　氷室茉胡
うねりつつ黒潮さし来夏茶碗　大阪　安藤久美
検温で始まる朝や濃紫陽花　大阪　高角みつこ
荒梅雨といふよりこれは狂ひ梅雨　大阪　高角みつこ
愕然と祇園囃子のなき年よ　大阪　高角みつこ
夜光虫波間に私の骨光る　大阪　山中紅蕚
老犬や梅雨の晴れ間を引かれ行く　大阪　内山薫
避けられて気づくやマスク忘れしを　大阪　内山薫
梅雨出水いつもの川がおそろしき　大阪　木下洋子
白髪や洗へば黒く濡れてをり　大阪　澤田美那子
俳諧の志あり蛞蝓　大阪　齊藤遼風

己が角振り回してやなめくじら　大阪　齊藤遼風

梅雨寒や人を隔てて人を恋ひ　兵庫　加藤百合子

・ふ

この夏はことに愉しき鳥の声　兵庫　加藤百合子

遠雷や心の奥の閑かなる　兵庫　千堂　富子

白百合の膨らみかけて供花に剪る　兵庫　髙見正樹

上潮に波立つ河口晩夏光　兵庫　髙見正樹

中空に青き半月秋近し　奈良　田原春

大木に満つる花合歓池の端　奈良　田原春

黒揚羽はばたきながら蜜を吸ふ　岡山　齋藤嘉子

ふるさとの山河よ桃のかぐはしく

・桃はかぐはしき

わが一生原爆忌ありコロナ禍あり　広島　三好芳枝

夜濯のマスク満ち欠けしたる月　香川　丸亀葉七子

夏薊杖忘れ来しこと忘れ　香川　丸亀葉七子

梅雨入穴遠回りして遍路寺へ　香川　丸亀葉七子

丈ながき　大和撫子　いただきぬ　香川　元屋　奈那子

偶々の生をながらへ星祭　福岡　北井乃峰子

捨てられてマスク汚物と化す夏野　福岡　北井乃峰子

夏草の沖からこつと戦闘機　長崎　川辺酸模

まくなぎの吶喊止まぬ夕べかな　長崎　川辺酸模

師を選び我ら炎天歩みける　大分　山本桃潤

・ゆく

これからも不器用ならん蟇　大分　竹中南行

膝小僧アカチン丸く裸足の子　鹿児島　大西朝子

七月三十一日号

【特選】

コロナ禍の彩も切なき花火かな　秋田　佐藤一郎

巣籠もるや五色並べて奈良団扇　埼玉　藤倉桂

術衣着て待つ私以外全部夏　東京　長井亜紀
驚きし蜥蜴やわれもおどろきぬ　東京　堀越としの
星空へ抱き上げられて遠花火　東京　齊藤拓
・られし花火かな
蜘蛛の巣を払へば糸のまつわり来　神奈川　越智淳子
滝壺を水おとなしく出てゆけり　神奈川　金澤道子
夕風に息するつぼみ紅芙蓉　神奈川　原田みる
蓮の花肩に担ひて帰りけり　神奈川　水篠けいこ
梅雨出水見る間に橋が流れ去り　神奈川　土屋春樹
・去る
爽やかな文字の遺句帖特攻へ　神奈川　那珂侑子
白桃の箱をそおっと開けるとき　神奈川　那珂侑子
天空に地球が赤く燃える夏　長野　大島一馬
永うながう研しはるか富士は花影　長野　柚木 紀子
初盆や激しき性も石の下　愛知　青沼尾燈子

・激情もいま　京都　氷室茉胡
みな河馬の顔(かんばせ)となる昼寝覚　兵庫　千堂富子
・われ河馬の
噴水の穂の柔らかき夜風かな　兵庫　天野ミチ
短夜や明けて無衛な最上川　兵庫　藤岡美惠子
虚空より一筋の青糸とんぼ
・虚空飛ぶ
海はエロス真白なヨット走らせて　大分　山本桃潤
死んだ子がいつも待ってる墓参り　鹿児島　大西朝子
・待つてる

【入選】

夏木立コロポックルや見えかくれ　北海道　高橋真樹子
・コロポックルは
漂へる三日月湖蓮はまぼろし　北海道　芳賀匙子
万緑を落ちゆく水の一直線　北海道　柳一斉

コロナ禍に眼を休めたる若葉かな　北海道　柳一斉
・コロナ禍の　東京　森徳典
立葵更地の続くシャッター街　宮城　長谷川冬虹
・更地またある　東京　森凛柚
打水の跳びゆく先の無明かな　福島　渡辺遊太
耳鳴りのことさら激し今朝の秋　埼玉　園田靖彦
立ち上る浅間のけぶり今朝の秋　埼玉　園田靖彦
母の手に古きアルバム八月来　埼玉　藤倉桂
オルゴール不意に鳴り出す暑さかな　千葉　菊地原弘美
速さうな瓜茄子選び魂迎　千葉　若土裕子
・茄子や胡瓜や　千葉　若土裕子
ご自慢は鱧の骨切り逝き給ふ　東京　岡　惠
長き長き自粛の日々や百日紅　東京　岡田栄美
草むしりクッキー焼きて母を待つ　東京　岡田栄美
梅雨曇りママは真っ赤なワンピース　東京　岡田栄美
・真赤な　東京　森徳典
片影に一息入れて駅舎まで　東京　森凛柚
・片陰で、でを嫌うなかれ。　東京　森凛柚
膝抱へ塗るペディキュアや夏の果　東京　森凛柚
見えてゐて見てゐぬ場所に黴の花　東京　神谷宣行
志野碗のなかの静寂夜の秋　東京　西川遊歩
籐椅子は我が全身を待ちゐたり　東京　楠原正光
物置の鎌を取出し残暑かな　東京　楠原正光
・取り出す　東京　堀越としの
薄くうすく新玉ねぎの甘さかな　東京　堀越としの
・甘さ、が甘い。　東京　櫻井滋
明日開く百合のかほりや雨あがり　東京　櫻井滋
・かをり　東京　櫻井滋
百合の香やまづ東京を換気せん　神奈川　越智淳子
夕暮れてピアッツア噴水の音ばかり　神奈川　越智淳子

写経の手休め目を遣る半夏生　神奈川　遠藤初惠

まつ先に声さらはれて滝の前　神奈川　金澤道子

・るる

林間を進むごとくに蓮見舟　神奈川　金澤道子

梅雨寒の部屋の真中にだんご虫　神奈川　原田みる

・真中を

あの夏の京都で買うた帽子かな　神奈川　三玉一郎

朝空の玄関に立ち蝉時雨　神奈川　森川ゞ子

・立つ

手拍子に噴水空を駆け上る　神奈川　水篠けいこ

・上がれ

東京の夏がぼやけるマスクかな　神奈川　中丸佳音

機内食窓の向かふに雲の峰　神奈川　土屋春樹

一筋の風に置かれし籐寝椅子　神奈川　湯浅菊子

梅雨明を待ちきれず蝉鳴きだしぬ　神奈川　那珂侑子

日生港籠をはみ出す蝦蛄の足　神奈川　服部尚子

かなかなや死者を伝へるテレビ画面　新潟　安藤文

マスクして客やつて来る暑さかな　新潟　安藤文

泥つけしまま草立ち上がる出水後　新潟　高橋慧

おねしよしたこともありなん豆ごはん　石川　花井淳

・ありけり

鮎釣りや九頭竜居眠りしてをりぬ　石川　花井淳

雨はらむ雲井に登る凌霄花　石川　花井淳

・雲井へ

息殺し人を待ちをり毒茸　長野　大島一馬

積乱雲一瞬陽光移動せり　長野　大島一馬

抽象化無理だなんて闇ほうたる蛍　長野　柚木紀子

夫出かけ家は閑かや蓮の花　岐阜　夏井通江

蜘蛛の巣に顔を捕られて四苦八苦　岐阜　古田之子

・しまひけり

ほしいまま遊びし雲の夕焼けや　岐阜　三好政子
・夕焼けて　・端居かな
町暑し抜苦与楽と大き文字　岐阜　三好政子　鵜籌の弾けて深き山河かな　愛知　野口優子
バッグより本出して待つ白雨かな　岐阜　三好政子　・闇夜かな　三重　乾　薫
草いきれ雨のあがりし大八洲　岐阜　梅田恵美子　夕焼けに向かいてさげるレジ袋
大梅雨や闇おそろしき泥の川　岐阜　梅田恵美子　・向ひてゆくや　大阪　高角みつこ
しんしんとシーラカンスの夏来る　静岡　池ヶ谷章吾　涼風やこけしのやうな顔と顔　大阪　高角みつこ
・しんかんと　天道虫帽子の底へ転げ落つ　大阪　内山薫
電柱の影に身を置く炎暑かな　静岡　池ヶ谷章吾　ひるがへる燕の腹の白さかな　大阪　澤田美那子
まづ蠅が降り来る南方帰還船　愛知　臼杵政治　大阪は西風が頼りよ夕焼けて　大阪　澤田美那子
胎の児と戦死嘆けり終戦日　愛知　宗石みずえ　つまらなきものを楽しく夜店の灯　大阪　澤田美那子
・嘆きぬ　・つまらなきものきらきらと夜店かな
このよはひあまたのつみや冷奴　愛知　青沼尾燈子　さみどりは少年の色ソーダ―水　大阪　齊藤遼風
昼寝覚うゐのおくやまけふもゆく　愛知　青沼尾燈子　思ひ出を香水瓶に詰め込みし　兵庫　千堂富子
亡き人の声の聞ゆる夕端居　愛知　野口優子　明日といふ不思議迎へん冷奴　兵庫　藤岡美惠子
夏シャツの下の筋肉キャッチボール　奈良　田原春

葛切や水ゆらゆらと運ばるる　和歌山　玉置陽子

蝉しぐるる中を行かねばならぬかな　岡山　齋藤嘉子

・蝉しぐれ中を

百日紅いのち長くば恥多し　香川　曽根崇

老の愚痴さらりと受けてビール注ぐ　香川　曽根崇

・かはし

雷鳴といふ小気味よきものの中　愛媛　豊田喜久子

水害の村に燃ゆるよ百日紅　長崎　川辺酸模

麦茶飲み決めの一手や棋聖戦　長崎　百田直代

・一手へ

通らねばならぬこの道灼けに灼け　長崎　百田直代

・灼けてをり。力んでもダメ。

あぢさゐのほのとあかるき草枕　熊本　筑紫秋蘭

・あかるし

夕刊を広げ爪切る原爆忌　鹿児島　大西朝子

八月十五日号

【特選】

敗戦忌青柚のごとき学徒らよ　宮城　長谷川冬虹

草も木も黙る八月人間は　福島　渡辺遊太

・人間も？

梅干すや座り心地を梅に聞き　埼玉　藤倉桂

流れゆく鮎も釣師も水の影　東京　西川遊歩

胸に汗真一文字の手術跡　東京　櫻井滋

七十五年後の少年敗戦日　東京　櫻井滋

気に入らぬことあるらしき団扇かな　神奈川　金澤道子

大いなる残火八月十五日　神奈川　三玉一郎

手から手へわたす八月十五日　神奈川　三玉一郎

炎天や不協和音の交差点　神奈川　天野史郎

この年は短冊一枚星祭り　新潟　高橋慧

胃切りしむかしありけり生身魂　長野　金田伸一

老の守る遺髪は黒し終戦日　愛知　宗石みずえ　迎火や道の真中に鳥の糞　北海道　芳賀匙子

灯籠のほのほのいのちほのぼのと　大阪　古味瑳楓　いわし雲一言でいいなにか言へ　北海道　柳一斉

この坂も懐かしからむ門火たく　兵庫　藤岡美惠子　まがまがしき令和二年の敗戦日　宮城　長谷川冬虹

八月や哀しみの翼垂れてあり　岡山　齋藤嘉子　天を衝けねぶり流しの魔除幣　秋田　佐藤一郎

・八月の　熱帯夜羽化せし蝉の静かなり　埼玉　佐藤森恵

朽ちゆける鉄扉八月十五日　福岡　北井乃峰子　夏草刈る赤銅色の腕あり　埼玉　上田雅子

美しや人を欺く熱帯魚　大分　土谷眞理子　あと幾日粒数え食う黄蜀黍　埼玉　湯浅寒葵

星合ひの壱岐や対馬や浪とどろ　不明　園田靖彦　ゲリラ雨通り過ぎたる金魚鉢　千葉　若土裕子

取って置き今年切り出す七夕竹　不明　園田靖彦　捕へしはあまたの影や補虫網　千葉　若土裕子

・取つて　鍵あける鈴の音かすか夜涼かな　千葉　若土裕子

コロナ後も変わらぬものに心太　不明　高角みつこ　くたびれてズーム終わるや西日射す　千葉　谷口正人

・変はらぬ　今朝秋の枝に見慣れぬ鳥一羽　千葉　池田祥子

【入選】　夜濯のほそき水音響きけり　千葉　麻生十三

地にふれしほおづき一つやおらあか　北海道　芳賀匙子　骨壺の無きひともいる霊迎え　千葉　麻生十三

・文語体の新かな、アウト。以下同じ。　世はことのほかなれど雲の峰すつく　東京　井上じろ

鳴き出してみんみん空の何か呼ぶ　東京　井上じろ
胸張りてマスクはずすは炎天下　東京　永井奈緒
松虫や闇へ闇へと誘われぬ　東京　岡　惠
・誘はるる
夕星や我は茗荷の花刻み　東京　岡　惠
・刻む
流星を待ちて眠ってしまひし子　東京　岡　惠
蝉鳴いて父命日やあと三日　東京　岡田栄美
大見出しは疫病み累計原爆忌　東京　市村さよみ
逆縁や墓石潤す盆の朝　東京　森徳典
八月やことさら寒き十五日　東京　神谷宣行
竹取の翁とならん星祭　東京　神谷宣行
地に降りて真水吸ふ群れ揚羽蝶　東京　西川遊歩
ねこじゃらし骨壺のあり花瓶あり　東　京
長井信彦

毎年の会釈をかはし墓参り　東京　楠原正光
夏の海少しゆがんでゴッホの椅子　東　京
畠山奈於
孫と見る戦争映画星涼し　東京　堀越としの
咲ききって首を垂れおり向日葵よ　神　奈　川
伊藤靖子
さまざまな蝉競ふ声昼下がり　神奈川　伊藤靖子
アウシュビッツに子供が死せり晩夏光　神　奈　川
越智淳子
干草の匂ひ立ちおり野の真昼　神奈川　遠藤初恵
送る荷の隅に二匹のかぶと虫　神奈川　遠藤初恵
崖の上の鉄砲百合に見下ろさる　神奈川　遠藤初恵
箱庭に撒いて土産の星の砂　神奈川　金澤道子
ともしびの如く咲きけり鶏頭花　神奈川　原田みる
かなかなや一村染むる大夕日　神奈川　原田みる

夏海やこの淋しさのゆゑ知らず　神奈川　三浦イシ子　しんしんとスカイツリーの秋さびし　新潟　安藤文

この場所が吾子のふるさと虹架かる　神　奈　川　蝉の声いやに大きいこの夏よ　新潟　安藤文

松井恭子

撫子の花のおもみをぬいとりぬ　神奈川　森川ゞ子　ゆうゆうと窓を過ぎゆく蜻蛉かな　新潟　安藤文

短編に栞挟んで氷水　神奈川　水篠けいこ　学生棋士の目元涼しき一手かな　石川　花井淳

朝焼や二日つづきの夢をみて　神奈川　中丸佳音　遅れくる音やはらかく遠花火　石川　岩本展乎

目を瞑り暑さに耐へむ原爆忌　神奈川　中丸佳音　今生の句集成りたり赤のまま　長野　金田伸一

故郷やしんしんと聞く虫の闇　神奈川　天野史郎　もうつぎの句集の夢を白木槿　長野　金田伸一

敗戦忌学徒の叔父は未だルソン　神奈川　土屋春樹　・句集を夢に

アリ神輿蝉の躯を担ぎ行く　神奈川　土屋春樹　山鳩は繰り言並べ敗戦忌　長野　大島一馬

仏壇に白桃妖し影落とす　神奈川　湯浅菊子　ゆび触るる兎(と)罠猪罠かるいざわ　長野　柚木紀子

八月を管長さまと坐禅組む　神奈川　那珂侑子　雨上がり路にうつりし夏の蝶　岐阜　夏井通江

えのころや買い物帰りに二、三本　神奈川　服部尚子　葉の裏を青虫毛虫蝉の殻　岐阜　古田

・に

火の神を鎮めて御山洗かな　神奈川　片山ひろし　万歳は終生すまじ敗戦日　岐阜　三好政子

栗うまし焼いてはじけてひとつづつ　神奈川　片山ひろし　宙を舞ふ馬のしつぽや雲の峰　岐阜　梅田恵美子

盆の月竹馬の友は化石化中　静岡　池ヶ谷章吾

プチトマト次々爆ぜる残暑かな　愛知　稲垣雄二

七転八倒くしやくしやの夏布団　愛知　青沼尾燈子

高原に二羽の秋蝶出会ひけり　愛知　野口優子

灯にすける小さき指の守宮かな　三重　乾　薫

燃えながら残る暑さの日が西に　京都　佐々木まき

生きている限りは八月十五日　京都　佐々木まき

・は、不要

裏方に徹す来し方稲の花　京都　氷室茉胡

燈籠の水よりあはく流れゆく　大阪　安藤久美

白粉の黒き実どなたでもどうぞ　大阪　古味瑳楓

遠花火忘れきりたる思ひふと　大阪　山中紅蕘

大やかん傾けて注ぐ麦茶かな　大阪　内山薫

熱帯夜たたみの上をごろりごろり　大阪　内山薫

コロナ禍に読書が力秋に入る　大阪　木下洋子

炎天に闇を見てゐし敗戦日　大阪　澤田美那子

・円天の、ゐる

茄子の馬お役目終へて食はれけり　大阪　澤田美那子

産土に父母なくて雲の峰　大阪　齊藤遼風

舌下にしぶく夏大根の辛味かな　兵庫　加藤百合子

閃光の果の灼熱蓮の種　兵庫　加藤百合子

老と幼ふたつの背中魂祭　兵庫　加藤百合子

手花火や小さき膝が輪をつくり　兵庫　千堂　富子

じゃあじゃあと聞こゆる声や残る蝉　兵庫　天野ミチ

きりり結び今宵箸置き茗荷の葉　兵庫　藤岡美惠子

良夜かな知人と出会う散歩道　兵庫　髙見正樹

家ぢゆうの戸口開きて秋入れむ　奈良　喜田りえこ

椋鳥や狙ひすまして犬の餌へ　奈良　田原春

大瑠璃やシャッター忘れ聴き惚れて　奈良　田原春

夕べまだ草いきれある散歩径　香川　丸亀葉七子

空蝉に猫との想ひ出あまたあり　香川　丸亀葉七子

・と、不要

したしたと　死者の書つむぐ　蓮の糸　香川　元屋奈那子

大津皇子　いらつめ織りし　蓮衣　香川　元屋奈那子

・一字あけ、不要。

石切場灼けし足場に立ちくらむ　香川　曽根崇

土用干わが生涯を曝しけり　香川　曽根崇

終戦日引き揚げの荷に琴の爪　愛媛　豊田喜久子

影を濃くして八月の白い道　愛媛　豊田喜久子

夜のうちに繕ひてあり蜘蛛の網　福岡　北井乃峰子

蚊帳の海幼き兄と泳ぎしが　福岡　北井乃峰子

沖縄の星霜醸す古酒(くうす)かな　長崎　川辺酸模

いつもとは違ふ寂しさ盆まいり　長崎　百田直代

炎昼の透きとほりたり壁のごと　熊本　筑紫秋蘭

雲海や釈迦さみしげに眠りたまふ　熊本　筑紫秋蘭

風鈴のリズムを貫へよき言葉　大分　山本桃潤

新涼や意のままに伸ぶ鉋屑　大分　竹中南行

桃缶が真ん中にある冷蔵庫　不明　高角みつこ

八月三十一日号

【特選】

これ以上優しく持てぬ白桃よ　埼玉　藤倉　桂

・ず、は

海深き父の硯を洗ひけり　千葉　若土裕子

畦道の蝗追ゐし日ひもじかり　東京　森徳典

今朝の秋聞こゆる音のみな静か　東京　森凜柚

地獄の門残暑の真つ只中に立つ　神奈川　金澤道子

あけ放つ家に色なき風の吹く　神奈川　森川ヨシ子

・を

子の逝けば選るさへ悲し草の市　愛知　宗石みずえ

梨剥けば故郷の水の香りかな　京都　氷室茉胡

・せり

池の水抜く話しなど秋暑し　大阪　高角みつこ

青空の天辺に秋来てゐたり　大阪　澤田美那子

秋来しと気合ひ入れねば秋の来ず　大阪　高角みつこ

・秋は

塔ふたつ空に漂ふ今朝の秋　奈良　喜田りえこ

・を

真つ白なマスクごしにも涼新た　大分　土谷眞理子

【入選】

老ひし犬坂登りくる今朝の秋　北海道　高橋真樹子

抽斗を開けるやどこも秋の風　北海道　柳一斉

同じ眉男子揃うて墓洗ふ　宮城　長谷川冬虹

・子、不要

其際にほほゑみしことすいつちよん　福島　渡辺遊太

稲の花死者の戻つて来る野道　福島　渡辺遊太

・稲と野、ダブル

公園のベンチにひとや秋昼寝　埼玉　おほずひろし

・ひと、不要

雲の峰八方に湧き何ごとぞ　千葉　谷口正人

参道を一歩一歩の秋日傘　東京　岡田栄美

明日より六十路を歩く残暑かな　東京　荒木大和

秋の日や灼かれて熱き駅出口　東京　神谷宣行

・に

八月やははの倍生き傘寿越え　東京　畠山奈於

山荘も代替はりして芒かな　東京　櫻井滋

横浜の夜空球音涼新た　神奈川　井上じろ

・夜は

胴声の合間板漕ぎ手洗ふ　神奈川　越智淳子

羽根のみを残して蝉は喰はれけり　神奈川　遠藤初惠

さゆらぎもせずに残暑のさるすべり　神奈川　金澤道子

ベビーカー秋の暑さを押して来る　神奈川　金澤道子
金箔の一片の虫鳴きにけり　神奈川　三玉一郎
ほほづきの中ひとつづつ恋の歌　神奈川　三玉一郎
亡き人の夢見たしとや天の川　神奈川　松井恭子
・夢が見たかり。原句、他人事。
逃げてゆく後ろ姿の秋の蚊ぞ　神奈川　那珂侑子
編笠のおとがひ清し風の盆　神奈川　服部尚子
実ざくろや父の訃を聞く転任地　神奈川　片山ひろし
ドロップ缶カサコソと鳴る朝顔の実　新潟　高橋慧
・リズムを
外野手が飛球の下に鰯雲　石川　岩本展乎
・下へ
残暑とはすなはち猛暑列島火　長野　金田伸一
しづかにもちかづく火振り香魚めざめよ　長野　柚木紀子
コロナ禍をわすれて河原に夏惜しむ　岐阜　古田之子
・忘れ河原の
皺くちやの笑顔たふとし生身魂　岐阜　梅田恵美子
あの世よりこの世は暑し門火焚く　岐阜　梅田恵美子
分け入りて藪に小さき栗拾ふ　愛知　野口優子
砂糖黍かじる故郷遠かりし　愛知　野口優子
・き
白百合や空家の庭に凛と立ち　三重　乾薫
・つ
柳散る籠り暮しの今もなほ　京都　佐々木まき
・る
秋の早来てゐる御所の小川かな　京都　氷室茉胡
夕立の中へ駆け出す待ち合はせ　大阪　内山薫
麻痺の手のいと柔らかし秋の風　大阪　内山薫
玉音は人声なさず敗戦日　大阪　澤田美那子
日本の哀しみの月八月行く　兵庫　加藤百合子

近道と入りし叢露しとど　兵庫　髙見正樹
夕顔の雫で硯洗ひけり　奈良　喜田りえこ
明け方の露にまみれて芦を刈る　奈良　喜田りえこ
老いの背に厳しき残暑左官職　奈良　田原春
老いぬことかなしからずや星の恋　岡山　齋藤嘉子

・理屈

水落す屋号を記す板の堰　香川　丸亀葉七子

・ごちゃごちゃ

小気味よき音ひびかせて木賊刈る　香川　曽根崇
蔵壁の白のまぶしき残暑かな　愛媛　豊田喜久子
古りしまま馴染みて秋の簾かな　愛媛　豊田喜久子

・める

おもいきり鳴いて秋蝉とび立てり　愛媛　豊田喜久子
秋澄むや九重連山指呼の中　長崎　川辺酸模
雲ばかり見て夏休み果てにけり　長崎　百田直代

終戦日名簿にはなき関連死　大分　竹中南行
生き死には単純がよし稲光　大分　竹中南行
台風を呑み込んでゐる台風かな　不明　園田靖彦

九月十五日号

【特選】

葡萄狩る乳房のごとき一房を　埼玉　上田雅子
浅漬やこのひと塩に母の味　東京　岡田栄美

・ひと塩の

ふるさとの少年となり鰍突く　神奈川　片山ひろし
真夜中の飛蝗と遊ぶ一詩人　長野　金田伸一
街なかの水路に魚影水澄める　兵庫　髙見正樹
しやりしやりと二十世紀や口の中　兵庫　天野ミチ

・澄めり

ふがふがとオルガンを弾く夜長かな　和歌山　玉置陽子

【入選】

秋風のはやさで登るリフトかな　北海道　高橋真樹子
ぬるま湯にほろほろほどくはらごよ　北海道　芳賀匙子
歩きたし紫陽花のある旧家まで　北海道　柳一斉
二番花桔梗いよいよ群れ咲けり　宮城　長谷川冬虹
蒼穹の切り岸高し秋の蝶　福島　渡辺遊太
虫売りの虫に名前をつけて呼ぶ　埼玉　園田靖彦
・虫売は
嫁となる女性に一献菊の酒　埼玉　藤倉桂
・嫁となる人
団塊の我ら老人大銀河　千葉　池田祥子
かなかなや昨日のはやも懐かしき　千葉　池田祥子
・はやも昨日の
夜なべして栗むく指や懐かしき　千葉　麻生十三
虫売りの棲み処は誰も知らぬまま　東京　西川遊歩
・虫売は

自然薯の蔓を見つける一仕事　東京　楠原正光
・蔓探すのも
身に入むや暗渠となりし渋谷川　神奈川　金澤道子
秋の野に泣く子走る子はだかんぼ　神奈川　原田みる
ドアノブに届けられたる秋なすび　神奈川　水篠けいこ
幼子の髪に一輪秋桜　神奈川　土屋春樹
牛群れて人を見に来る花野かな　神奈川　湯浅菊子
桐の葉や残暑の風になぶられて　神奈川　服部尚子
チェロ弾きが道を横切る星月夜　石川　岩本展乎
湿原に木道白し秋に入る　長野　大島一馬
・白し？
秋日和放心の蝶迷い来ぬ　長野　大島一馬
うすらひの絶対音感娘ハモ　長野　柚木紀子
恐竜の背中のやうなゴーヤ割く　岐阜　三好政子
露ふみてめざす山巓雲のなか　岐阜　梅田恵美子

山の宿水旨かりき星月夜　岐阜　梅田恵美子　無花果を二三のこして白寿かな　大阪　齊藤遼風

・山宿の　　ぎんどろのさやぐや白き秋の風　兵庫　加藤百合子

森閑と耳鳴りを聴く良夜かな　静岡　池ヶ谷章吾　折鶴に命吹き込む秋の夜　兵庫　千堂富子

秋扇かすかに骨の音したり　愛知　稲垣雄二　黙祷の一穂一穂や青田風　兵庫　藤岡美惠子

振り向ける野良着の美貌葛の風　愛知　宗石みずえ　朝歩き玄関出ればそぞろ寒　兵庫　髙見正樹

コンビニへいつもの道の虫時雨　愛知　宗石みずえ　上げ潮に波立つ河口秋の昼　兵庫　髙見正樹

長茄子に跨り父は西方へ　愛知　青沼尾燈子　初鴨の羽をやすめる水の音　奈良　喜田りえこ

秋風に丸ごと吹かれ大文字山　京都　佐々木まき　鰯雲ラジヲの告ぐる死者の数　奈良　喜田りえこ

ウイルスの世に一抜けて行く夏よ　京都　佐々木まき　芳しき畦の匂ひや蜻蛉行く　奈良　田原春

・世を　　稲刈るや西行庵を仰ぎつつ　和歌山　玉置陽子

近頃は妻の言ひなりいぼむしり　京都　氷室茉胡　たましひを夏のどこかに忘れけり　岡山　齋藤嘉子

邯鄲の壊れさうなるうすみどり　大阪　古味瑳楓　雨粒の映える七色唐辛子　香川　丸亀葉七子

蝶睦むきりきりと射す陽射し中　大阪　山中紅蕎　虚空よりひとかけの詩を水の澄む　香川　元屋奈那子

虫売の今年は居らず虫の声　大阪　木下洋子　心中に一本の木や涼新た　愛媛　古志溢子

生き難き日の幾日ぞ蝦蛄を剥く　大阪　齊藤遼風　アルバムを開きしよりの秋思かな　長崎　川辺酸模

朗々と杜甫よむ夜学教師かな　長崎　百田直代
佇立して見上ぐるばかり今日の月　熊本　筑紫秋蘭
草の花自由の価値を知る香港　大分　山本桃潤
もう眠し眠らせてくれ酔芙蓉　大分　土谷眞理子

九月三十日号

【特選】

火照る身をばさと浸さん秋の風　福島　渡辺遊太
鬼柚子やマスクの顔も慣れにけり　東京　岡惠
マスク越し沁みくるかをり葛の道　東京　畠山奈於
鈴虫に負けじと蝮蛄の鳴く夜かな　長野　金田伸一
夫寝ねて灯火親しも青インク　岐阜　三好政子
・自分だけの時間。
あかあかや命を染める赤蜻蛉　岐阜　梅田恵美子
・あかあかと命染まりぬ
親の知らぬ道も行くらし草虱　愛知　宗石みずえ

父と来て草に隠れる小鳥狩　大阪　山中紅蕘
・れし
アユタヤの秋恋しがる子象かな　奈良　喜田りえこ
のどぐろや百万石の箸に秋　奈良　喜田りえこ
・箸の秋
てのひらに笹舟ひとつ秋うらら　大分　竹中南行
小宇宙集めて葡萄大宇宙　大分　土谷眞理子

【入選】

飛べることうれしき空へ雁帰る　北海道　高橋真樹子
夕顔の実一つ畑の仕舞はるる　北海道　芳賀匙子
かんぺうをへろへろ剥きて真白かな　北海道　芳賀匙子
明日ありと閉づる眼や星月夜　北海道　柳一斉
白桃や乳房むさぼる赤子かな　宮城　長谷川冬虹
・白桃の

月代や団子積む妻たわいなし　秋田　佐藤一郎

・たわいなく

束の間の縁なりけり菊膾　福島　渡辺遊太

目が覚めて秋の呼吸になりてをり　埼玉　佐藤森恵

宇宙（コスモス）の色みな集め落ち葉かな埼玉　埼玉　佐藤森恵

新米来る田を守りゐる兄一人　埼玉　上田雅子

・田を守る兄一人より

姿なき遠吠えさまよふ霧の街　埼玉　湯浅寒葵

蒼天や毬栗笑栗出落栗　埼玉　藤倉桂

秋澄むや姉と口紅選ぶ昼　千葉　菊地原弘美

ごろごろと湯もみのやうや桶の芋　千葉　若土裕子

秋雨や傘で間をとるディスタンス　千葉　谷口正人

山雀の戻り来る垣秋高し　千葉　池田祥子

父背負ひ秋の山行く湯治かな　千葉　麻生十三

自転車の曲線朱色秋めきぬ　東京　井上じろ

ぬくめ酒ちりめんさんしょのぴりからと　東京　横山直典

・さんせうぴりからと。旧仮名が読みにくければ漢字に。

手に触れし表紙ひやりと秋の暮　東京　岡惠

色褪せしもんぺばかりの茸採り　東京　岡田栄美

蓑虫のこれ一筋のいのち綱　東京　岡田栄美

鬼の子の密を嗤ひて揺るるかな　東京　市村さよみ

骨納む何時か吾身も秋彼岸　東京　森徳典

大いなる自然のちから芋虫に　東京　神谷宣行

秋風やちりりとミント乾きゆく　東京　西川遊歩

土用波いよいよ富士は青くあれ　東京　長井亜紀

点滴がいのちのみづや滴れり　東京　長井亜紀

あをさぎや夏を揺らせよゆさゆさと　東京　長井亜紀

子等さりてあとかたもなき彼岸かな　東京　長尾貴代

秋風や我が身の内を通り抜け　東京　楠原正光

上寿まで杖一本や今日の菊　東京　畠山奈於

秋の朝脱ぎ着手を貸すこと多く　東京　畠山奈於
啄木鳥に戸を叩かれて八十路かな　東京　櫻井滋
不知火を待てど見えざりあの闇夜　神奈川　伊藤靖子
落ち葉踏む音むかふより来りけり　神奈川　遠藤初惠
虫売りが夕暮れ連れて来たりけり　神奈川　金澤道子
水澄むや空より青く映る空　神奈川　原田みる
後悔の雲に寝ころぶ夜長かな　神奈川　三玉一郎
十手先の秋を見てゐる扇かな　神奈川　三玉一郎
日の影にかくれてをりぬ赤蜻蛉　神奈川　松井恭子
味噌漬けの一切れうれし栗おこわ　神奈川　水篠けいこ
三畳間机代わりの林檎箱　神奈川　水篠けいこ
曼殊沙華恐ろしかりし下校途　神奈川　中丸　佳音
ちよつかいを出すなと怒るいぼむしり　神奈川　湯浅菊子
これぞ秋晴れどこまでも歩きたし　神奈川　那珂侑子
熊の仔と競ひてさがす通草の実　神奈川　服部尚子

車窓より富士の新雪まのあたり　神奈川　片山ひろし
色えんぴつ百本削り秋に入る　新潟　高橋慧
越中は刈田の中や西東　石川　花井淳
秋草やファールボールが転げ込む　石川　岩本展乎
鈴虫を飼へば真昼のこる高し　長野　金田伸一
鈴虫の総出に霧を吹きかくる　長野　金田伸一
人類は露つるかめあめつちに　長野　柚木紀子
「みんな長生きしないとね」炬燵猫千一つぴき　長野　柚木紀子
山宿の闇みづみづしずいき食ぶ　岐阜　夏井通江
噛んでみて絵本確かむややの秋　岐阜　夏井通江
稲刈や泥田の轍黒ぐろと　岐阜　古田之子
竜胆や龍太思ほゆ山の道　岐阜　梅田恵美子
雲遊ばせて金閣の秋の水　京都　氷室茉胡
吾が身の箍あちこち外れ木賊刈る　京都　氷室茉胡

こもりくの空の奥へと稲架を組む　大阪　安藤久美
望月は大き眼にあふれけり　大阪　古味瑳楓
校長は瓢箪ばかり遺しけり　大阪　古味瑳楓
秋の蜂信号待ちをからかひて　大阪　高角みつこ
涼しさや朝の戸開けの軽やかさ　大阪　山中紅蕘
秋の日の母のリハビリ紙風船　大阪　内山薫
山路来て僧が手打の走り蕎麦　大阪　木下洋子
月仰ぎコロナ籠りもよからんや　大阪　澤田美那子
姿よき子芋選びて衣被　大阪　澤田美那子
・選びぬ
一刷毛の雲の行方や松虫草　兵庫　千堂　寓子
家路なる暗き土手道夜寒かな　兵庫　髙見正樹
秋寒し舫ふ艀を洗う波　兵庫　髙見正樹
立て札の百姓一揆彼岸花　奈良　田原春
大甕へばさと入れたる芒かな　和歌山　玉置陽子

秋風の忘れてゆきし茶杓かな　岡山　齋藤嘉子
秋の風すさみに削る茶杓かな　岡山　齋藤嘉子
青葡萄吾の資産は想ひ出の束　香川　丸亀葉七子
人去りて秋風ばかり天守閣　愛媛　豊田喜久子
うたた寝て顔なつかしき青瓢　長崎　川辺酸模
・うたた寝の
風はるかよりはるかへと花野かな　長崎　百田直代
百幹の中の一幹竹を伐る　大分　竹中南行
おもしろや顔のゆがみし捨案山子　大分　土谷眞理子
生き死には表裏一体秋簾　大分　土谷眞理子
名月や遠回りして眼鏡橋　鹿児島　大西朝子
不機嫌な猫の瞳に月蒼く　鹿児島　大西朝子
・蒼し

十月十五日号

【特選】

大宇宙ぐらぐら揺らし雁渡る　北海道　高橋真樹子
一円も使はぬひと日天高し　東京　森凜柚
花野ゆく花野の果てのおそろしき　神奈川　松井恭子
男郎花見守るやうに女郎花　愛知　臼杵政治

体育の日だつたはずの今日終はる　大阪　高角みつこ
冷まじやアドレス消去ワンタッチ　大阪　澤田美那子
我が影を隠して白き蕎麦の花　大阪　齊藤遼風
・白し
孫娘の凭れ掛かるや月を待つ　奈良　田原春
・の、不要。これ重大。
月浴びて涙のねずみ動き出す　岡山　齋藤嘉子
・走り出す？
詳細は聞かず語らず温め酒　香川　曽根崇
磯菊やタンカーすでに視野の外　愛媛　豊田喜久子

赤とんぼ展望台に山迫る　愛媛　豊田喜久子
よれよれの地球憂ふやけふの月　福岡　北井乃峰子
・地球を憂ふ
コスモスの光まぶしむ二人かな　長崎　川辺酸模
屏風絵が終の棲家や秋の蝶　長崎　川辺酸模
・棲家か
長き夜や飴山句集の書写をせん　長崎　百田直代
・の、不要。同じく。
爽やかや老いて無くせしもの多き　大分　山本桃潤
・あまた
色付きし言葉の森を歩む秋　大分　山本桃潤
【入選】
さみしさの先頭に立つ芒かな　北海道　芳賀匙子
天高し島ひとつ置き湖黙す　北海道　柳一斉
糸瓜忌や食ふことが一仕事とは　北海道　柳一斉

豊作の松茸お裾分けの山　岩手　川村杳平
・松茸の山お裾分け
手のひらにささめく木の実宇宙塵　福島　渡辺遊太
痛風のしんしんと来て秋の雨　埼玉　佐藤森恵
・しんしんと痛し
妻であり母である日々鳥渡る　埼玉　藤倉桂
一揺れに壊れてしまふ熟柿かな　埼玉　藤倉桂
・一揺れで
長き夜の夜汽車の窓に映るかほ　千葉　菊地原弘美
一両はべつたら市の帰り客　千葉　菊地原弘美
ベランダに夫の寝椅子を月今宵　千葉　若土裕子
箒木や農家の鶏放し飼ひ　千葉　若土裕子
・の、不要。
啄木鳥のまほら打つ音澄みわたる　千葉　池田祥子
すり鉢にぼてんと坐るとろろかな　東京　岡田栄美
警官のマスクの黒のそぞろ寒　東京　岡田栄美
秋草と並び座りぬ月の前　東京　岡惠
捧げ持つ皿を全き熟柿かな　東京　市村さよみ
・皿に
あつけなく抜けるスランプひよんの笛　東京　森凜柚
白き手の舞ふやグレコの枯葉散る　東京　西川遊歩
弟を棺に埋づめ燃ゆる菊　東京　西川遊歩
父がすり母がのばせるとろろ汁　東京　長井亜紀
・のばしぬ
草叢に確と立ちけり女郎花　東京　楠原正光
稲架の影伸びてひと日に事もなく　東京　堀越としの
・のびて一日何もなし
日々新た術後一年天たかし　東京　櫻井滋
秋風や異臭たちこむ秋津州　東京　櫻井滋
全校で落穂拾ひし山の村　神奈川　伊藤靖子

・拾へり　神奈川　越智淳子

その皺の迷路楽しき胡桃かな

窯変の果ての色なる柘榴かな

お日様をぎゆつと詰めたる柘榴かな　神奈川　金澤道子

・お日様のぎゆつと詰まれる　神奈川　金澤道子

コスモスを挿してひとりやティータイム　神奈川　金澤道子

・ひとりの

夕の日に仄かに染まる十日月　神奈川　原田みる

なかなかに形なさぬや鰯雲　神奈川　三浦イシ子

台風の大波岩に食ひ入るや　神奈川　三浦イシ子

夕映えの仕舞ひの色の熟柿かな　神奈川　松井恭子

蟷螂を月の草生に放ちたり　神奈川　水篠けいこ

氾濫の川を流れてゆく南瓜　神奈川　水篠けいこ

太股で磨く林檎や子は二十歳　神奈川　水篠けいこ

・太腿？

加はりてわれも揺れたし花芒　神奈川　中丸佳音

百目柿軒より吊るし故郷思う　神奈川　土屋春樹

・軒に吊して

蛇穴に入れば夢見る蛇となる　神奈川　湯浅菊子

・入りて

遠き日の少年となりひよんの笛　神奈川　片山ひろし

・少年現れよ

しんしんと隔離病棟夜は長し　新潟　安藤文

秋の虹二重とあらば殊の外　新潟　高橋慧

新米の迷はず卵かけご飯　石川　岩本展乎

仏壇は掌合はすところ荒尾梨　長野　金田伸一

敗戦の日職員室で食べた兎　長野　柚木紀子

枯れし蓮まだ枯れぬ蓮雨しづか　岐阜　夏井通江

雨のなか歩いてふいに野菊かな　岐阜　夏井通江

夕冷えて調子あやしき鉦叩　岐阜　古田之子

月山や花野の果ては空のはて　岐阜　梅田恵美子
秋雨や雫をきそふ蓮の葉　岐阜　梅田恵美子
瞑目の日がな一日鬼の子よ　岐阜　梅田恵美子
冬瓜の身の置き所なき世かな　愛知　稲垣雄二
・冬瓜も
鮎落ちて寂しき星となりにけり　愛知　稲垣雄二
無花果やぐ通孚の子がおはやうと　愛知　臼杵政治
舟伏せて流木の浜秋夕焼　愛知　宗石みずえ
思ふこと一句にならぬ愚の秋よ　愛知　青沼尾燈子
まだ書けぬ便りのありて秋の暮　愛知　野口優子
名月や隣の瓦を照らしけり　三重　乾薫
・を、不要。
羽下げて枯れ木に休む蜻蛉かな　三重　乾薫
へそくりの場所忘れたり胡桃割る　京都　氷室茉胡
・忘れたる胡桃かな

池澄むや小魚ときに裏返り　京都　氷室茉胡
加減よき合はせ味噌玉秋日和　大阪　安藤久美
案山子の手かなしきまでに水平に　大阪　安藤久美
鹿の眼の中にも松の色変へず　大阪　古味瑳楓
俳句にも牛蒡引くにも筋肉よ　大阪　高角みつこ
バックパック開いたままなる夜長かな　大阪　高角みつこ
父の手を妹にゆずり鳳仙花　大阪　内山薫
・ゆづる
稔田を見たしと来しが苅田かな　大阪　内山薫
むき栗や皮むけぬ手のいとかなし　大阪　内山薫
大阪に都はありし今年米　大阪　木下洋子
・都の
豊年の力あふるる黄金波　大阪　澤田美那子
ひと筋の安堵の煙刈田中　大阪　澤田美那子
逆縁となるは一生温め酒　大阪　齊藤遼風

火の国に水豊かなり新ばしり　大阪　齊藤遼風
・火の国は
秋の海暮れてほのかに何の鳥　兵庫　加藤百合子
・ほのかや
月の宴はてたる後の月夜かな　兵庫　加藤百合子
どんぐりをにぎつたままで眠りをり　兵庫　千堂富子
とぎ汁は茶碗洗ひに今年米　兵庫　藤岡美惠子
敗荷や嘘と欺瞞の民主主義　奈良　喜田りえこ
御影堂やおん目の秋思深からむ　奈良　喜田りえこ
藁ぼつち太平洋を真正面　和歌山　玉置陽子
藁ぼつち夜はくれなゐの夢を見む　和歌山　玉置陽子
月浴びていやかぐはしきはざの稲　岡山　齋藤嘉子
新暦猫の写真が十二枚　香川　丸亀葉七子
声に出し秋明菊とはさみしき名　香川　丸亀葉七子
遠州の好みし茶碗秋の白　香川　元屋奈那子

月代やふところ深き山の宿　香川　元屋奈那子
石垣の石の温もり返り花　香川　曽根崇
祝ごと途絶えし日々や水引草　愛媛　豊田喜久子
括りたる新聞の嵩秋暑し　福岡　北井乃峰子
田の神のぼうと見てゐる田刈かな　長崎　川辺酸模
・ほうと
昼の虫虫歯きいきと穿らるる　長崎　百田直代
・上五ダメ。
コスモスや嫌はれ者になりきれず
若き日の夫に会ひたし紅葉かな　大分　竹中南行
・会ひたる
大分　土谷眞理子

十月三十一日号

【特選】

からからと落葉が歌ふ風の道　埼玉　上田雅子
酔芙蓉ふたいろに咲く寒さかな　東京　永井奈緒

障子貼る怒りの穴塞がれり　東京　永井奈緒
・怒りの穴も塞ぎけり
闇汁会闇をつくつて始まりぬ　東京　岡惠
奥能登の道路元標先は冬　石川　花井淳
秋冷や検査受くべく朝湯浴み　岐阜　三好政子
・む
水澄みて空のからつぽ映しけり　岐阜　梅田恵美子
・からつぽの空
大花野氷河削りし谷の中　愛知　稲垣雄二
また一つ大恥かくや秋扇　愛知　稲垣雄二
君と居るこの空間の秋惜しむ　愛知　稲垣雄二
・上々
真直ぐに切る真直ぐな新豆腐　愛知　臼杵政治
秋の蚊の血に酔ふらしや叩きたり　愛知　宗石みずえ
駆除と言ひ殺処分と言ふ冷まじき　愛知　青沼尾燈子

秋蝶とぶほどの静けき昼の庭　京都　佐々木まき
削り取る白龍が牙すさまじく　大阪　安藤久美
捨てられし案山子さながら秋昼寝　大阪　古味瑳楓
枯れてゆく蟷螂は目を動かさず　大阪　澤田美那子
・蟷螂の目の動きけり
黄落や北に南に大御堂　大阪　齊藤遼風
思ひ出の味濃き柿の老樹かな　兵庫　藤岡美惠子
骨の嵩カサリと崩る夜寒かな　鹿児島　大西朝子
・カサと崩るる
【入選】
かろがろと牛放ちやる大花野　北海道　高橋真樹子
・上五ダメ。
星月夜どこから話そう父のこと　北海道　高橋真樹子
・これは俳句の入口。この先を。
枯れながら秋のはちすは空を聞く　北海道　芳賀匙子

人間の骨と焼かるる赤のまま　北海道　柳一斉　・包まれて、不要。
・骨の　新米やこのいち椀に生かされて　千葉　麻生十三
思ひ出すものみな遥か秋の雲　北海道　柳一斉　・るる
読みさしのぎんどろ句集秋深む　宮城　長谷川冬虹　鶏頭の大きな頭考へる　東京　岡惠
・深し　・考へよ
獲りてなほ猟夫に残る殺気かな　秋田　佐藤一郎　うとましや生きながらえし秋蚊哉　東京　森徳典
・狩終へて　・秋蚊さへ
落日を訪ねて行けば新酒あり　福島　渡辺遊太　鷹渡る原子力空母眼の下に　東京　神谷宣行
いつの日か天駆け登れ穴惑ひ　埼玉　藤倉桂　・原子力空母眼下に鷹渡る
・穴惑ひいつの日か天駆け登れ　空中に嚇と火種の烏瓜　東京　西川遊歩
錦繍の秋の山々柿の葉寿司　千葉　若土裕子　・火種や
初霜や甘さ増したる百匁柿　千葉　若土裕子　望郷の流人の絶唱をみなへし　東京　西川遊歩
ドングリを拾う母子の影が伸び　千葉　谷口正人　・の、不要。
・ふ。影長く　夕暮れの灯りあまたや冬に入る　東京　楠原正光
ひとり打つ新蕎麦の香に包まれて　千葉　谷口正人　・灯り、ゆるい。

コスモスや雨戸を閉ぢしままの家　東京　畠山奈於
曼珠沙華人待ち顔の二、三本　東京　堀越としの
・に二三本
卓の林檎しなびはじめて剥かれけり　神奈川　越智淳子
炊きこむとせん薩摩芋さいころに　神奈川　金澤道子
秋ばらの園去りがたし女たち　神奈川　三浦イシ子
・き
何気なく来て真っただなかや紅葉踏む　神奈川　三浦イシ子
・真っ、不要。
灯を消して大きな秋に抱かれをり　神奈川　三玉一郎
キーを打つ窓の向かふを寒烏　神奈川　水篠けいこ
イーゼルを畳む背中に降る落葉　神奈川　水篠けいこ
方丈にわらふハロウィンの南瓜　神奈川　中丸佳音
童心のあかしろきいろ球根植う　神奈川　那珂侑子
干し菜とはいわず干い葉や会津道　神奈川　服部尚子
・干い葉？
我が心秘する如くに火を埋む　神奈川　片山ひろし
・秘するが如く。ただし埋み火の常識。
秋の田や何炊く白き煙上ぐ　新潟　高橋慧
結び目にこの婚礼の鶴来る　石川　花井淳
割烹の技の始まり柚の香り　石川　花井淳
鳴きほそる鈴虫を見る夜寒かな　長野　金田伸一
・のぞく
詩を語るゲーテに深みゆく秋ぞ　長野　金田伸一
百頭の牛の反芻牧の秋　長野　大島一馬
霧氷林「生なのに死」「死なのに生」　長野　柚木紀子
森は木精(もくせい)うすら氷(ひ)は斫　長野　柚木紀子
華やかに背高泡立草の土手　岐阜　夏井通江
トラックの過ぎて突風冬木立　岐阜　夏井通江
コスモスの原に鉄塔寡黙なり　岐阜　古田之子

堰こゆる水きらきらと峡の秋　岐阜　梅田恵美子
草の花こんなに地味でいま盛り　愛知　臼杵政治
懐かしき海に鳶舞ふ天高く　愛知　野口優子
鎌の手をしばし休めて草紅葉　三重　乾薫
・休めよ
脳ドック検査正常木の葉髪　京都　氷室茉胡
海苔巻きの玉子分厚き夜食かな　大阪　高角みつこ
会へば恋とどまらざらん火の祭　大阪　山中紅蕘
言い合へる朝にも高き空のあり　大阪　内山薫
・ひ
青蜜柑むけば幼き日にかへる　大阪　内山薫
・むいて
草の実を飾りて灯す我が家かな　大阪　内山薫
瓢の笛吹いて故郷の友のこと　大阪　木下洋子
蓮の実見つめてをれば飛び出さぬ　大阪　木下洋子
・ず
ねむるにはあまりに静か十三夜　大阪　澤田美那子
母のこと妻とふたりの夜長かな　大阪　齊藤遼風
天地をくるりと回す新走り　大阪　齊藤遼風
・る
白帝のうつらうつらと雲の上　兵庫　加藤百合子
押し寄せる木犀の香や開く窓　兵庫　髙見正樹
・窓ひらく
十三夜待つや芒の二三本　奈良　喜田りえこ
どの角も金木犀の香りかな　奈良　喜田りえこ
・この
東京の子の怖々と零余子飯　和歌山　玉置陽子
雲切れて女名月先づ一献　和歌山　玉置陽子
今まさにそらみつ大和柿の空　岡山　齋藤嘉子
帚草紅葉づさぬきの山円か　香川　丸亀葉七子

・づ、不要。

凩一号干柿甘く甘くなれ　香川　丸亀葉七子

残り蚊に覗かれてゐる密事かな　長崎　川辺酸模

その脛は細つてをるぞ蚊の名残　長崎　川辺酸模

我が墓標枯野に一つ石置きて　大分　山本桃潤

・石を置く

秋風の柳やしばし夢を見し　大分　竹中南行

・て

馬肥ゆる空となりけり馬の塚　大分　竹中南行

干柿や縁側広く空高く　鹿児島　大西朝子

・空広く

秋深し亡児のカバン捨てし朝　鹿児島　大西朝子

・く

十一月十五日号

【特選】

雪の夜を己が雪に変はるまで　北海道　柳一斉

・惜しいのは「を」。これが説明的精神の働き。雪の夜や

冬籠と思へば楽し入院日　東京　長井亜紀

父母の手のぬくもりや七五三　愛知　臼杵政治

・を、あるいは、の

漉きし紙人の温みの残りけり　京都　氷室茉胡

枯れ枯れて立つは菩薩でありしかな　大阪　安藤久美

蟷螂の石ごと枯れて石の上　大阪　古味瑳楓

冬苺見つけてはづむ山路かな　長崎　川辺酸模

襤褸布を繋ぎ詩にせん冬籠　長崎　百田直代

山茶花に鼻くつつける老いもよし　大分　山本桃潤

冬立つやここを栖の石たたき　大分　竹中南行

山茶花の咲きそろはんと蕾かな　大分　竹中南行

龍の玉仏の在す胸の中　大分　土谷眞理子

【入選】

はしゃぎ来る子らよ綿虫こそばいか　北海道　高橋真樹子

・はしやぎ。

初冬の人間しんと位置に着き　北海道　芳賀匙子

・着く

西国の空と光のみかん食む　北海道　芳賀匙子

・食ぶ

かな文字を大書したるや秋の雲　宮城　長谷川冬虹

・か

いくばくか日の差す方へ返り花　秋田　佐藤一郎

・上五ダメ。

町ぢゆうに熊の手配書うそ寒し　秋田　佐藤一郎

・季語再考。

車座に来よ亡き父母も蟋蟀も　福島　渡辺遊太

吊し切らる鮟鱇の科言ふてみよ　埼玉　園田靖彦

・言うて。「て」の前に「ふ」は来ないとでも覚えてください。

背文字まで陽のとどきをり冬の書庫　埼玉　佐藤森恵

・背表紙に

暁のむささび飛びて山眠る　埼玉　佐藤森恵

・暁や

池昏れて水鳥もみな昏れにけり　埼玉　上田雅子

うつし世の見飽きぬものに鳰　埼玉　上田雅子

此処母の終の棲家よ小鳥来よ　埼玉　藤倉桂

ジョギングで憂さを晴らすや鰯雲　千葉　谷口正人

・晴らさん

あらうれし冬立つ湯屋の掛け流し　千葉　池田祥子

・湯舟掛け流し

ヘルニアの膨らみ愛す小春かな　千葉　麻生十三

はやすでに疎ましきかな冬籠り　東京　いかいあつし

ちょい悪に見せる夫の冬帽子　東京　岡田栄美

・ちよい

腹立てど夜は揃いのちゃんちゃんこ　東京　岡田栄美

・揃ひ、ちやんちやんこ

日向ぼこ医院の前に椅子が出て　東京　岡惠

冬深き鮫の歯一つペンダント　東京　岡惠

網棚にみやげの大根寛げリ　東京　市村さよみ

・くつろぎぬ

湯たんぽや今日も安堵の足三里　東京　市村さよみ

ボージョレのワイン片手の家路かな　東京　森徳典

・ボージョレの新酒、片手に

汗油落とす柚子風呂夜勤明け　東京　神谷宣行

・ゴリ押し俳句。ここのところ勘を喪失？

入院の我に届けよ金屏風　東京　長井亜紀

みどりの手空にさしいれ松手入　東京　長井亜紀

寒風や揺れる吊橋こはごはと　東京　楠原正光

・寒風に。や、とするほどの場面ではない。

冬めける行き交ふ人も早足に　東京　楠原正光

・冬めいて、冬めくや

冬あたたかゆつたり揺れるもやい船　東京　楠原正光

・もやひ

小春日や園帽の子等あそこにも　東京　堀越としの

夜の街も終電もなし年送る　東京　櫻井滋

黄落やことばは土に戻りけり　神奈川　越智淳子

熱の身を癒すりんごの力かな　神奈川　遠藤初恵

凩や久々に観る西部劇　神奈川　遠藤初恵

青空の真中に秋の女郎蜘蛛　神奈川　金澤道子

読み返す本に紅葉の栞かな　神奈川　三浦イシ子

日向ぼこみるみる老いてゆきにけり　神奈川

三玉一郎

そしてまた月曜がくる日向ぼこ　神奈川　三玉一郎

降り立ちて小春の中へ旅鞄　神奈川　松井恭子

吠えかかる見知らぬ犬よ短日よ　神奈川　松井恭子

谷底のあの辺に咲けり冬桜　神奈川　森川ゞ子

・咲けり、不要。

柿食えばと言ひつつ柿を剥く子かな　神奈川　水篠けいこ

・食へば

愛犬の記憶新たに秋小道　神奈川　天野史郎

・秋の道

たくさんの鳶の舞ひゐて冬に入る　神奈川　那珂侑子

・上五いい加減。工夫せよ。

木の実なき山を下り来る母子熊　神奈川　片山ひろし

余生こそ枯木道とはするなかれ　神奈川　片山ひろし

・こそ、へン。

宙を飛ぶあまたの言葉や一茶の忌　新潟　安藤文

・や、不要。

深閑と木箱のりんご廊下かな　新潟　高橋慧

・りんごの木箱

鯉二匹泡二つや小六月　石川　花井淳

懐手してご隠居と呼ばしむる　石川　岩本展乎

・呼ばれゐる?

冬帽子目深にラジオ手放さず　石川　岩本展乎

あすあたり帰る燕の舞ふ夕べ　長野　金田伸一

神曲ダンテに新豆腐絹漉しに　長野　柚木紀子

一人来て障子の透ける日ざしかな　岐阜　夏井通江

・ゐて障子に

黄落やよちよちの子に走る子に　岐阜　三好政子

小春日やそこここに子と若き父　岐阜　三好政子

転ぶ子を枯草の香と共に抱く　愛知　宗石みずえ

笑む貌は少年のまま木の葉髪　愛知　宗石みずえ

・笑ひ顔　内山薫
柿落葉隣の庭に二三枚　大阪　木下洋子
・庭へ
若返る秘薬となさん鮫肝煮　京都　佐々木まき
顔に泥浴びて格闘泥鰌掘る　京都　氷室茉胡
茶の花や今は使はぬ登り窯　京都　氷室茉胡
まぼろしの琵琶に聴き入る夜長かな　大阪　安藤久美
天平の弓を弾けば鹿寄り来　大阪　安藤久美
立てるものみな鳴らしゆく凩は　大阪　古味瑳楓
天平の闇に冬立つおほぼとけ　大阪　古味瑳楓
一週間なにをしていてこの落葉　大阪　高角みつこ
・ゐて
狗尾草持ちてゆさゆさ街歩む　大阪　山中紅蕎
身にしみてしばし途絶へる会話かな　大阪　内山薫
咳の人と隣りあはせやそぞろ寒　大阪　内山薫

霜月やコートにバツのしつけ糸　大阪　内山薫
吊し柿見守る日々のたのしかり　大阪　木下洋子
・下五アウト。
てつちりや景気悪いと言ひながら　大阪　木下洋子
・これが理屈の句。
原子炉は岬の蔭に小春凪　大阪　澤田美那子
資本論飛ばして読める夜寒かな　大阪　齊藤遼風
白菜の芯のあらはに真二つ　兵庫　加藤百合子
・芯も
朝毎に冬を迎ふる覚悟かな　兵庫　天野ミチ
ここが天国ハキダメギクは満開に　兵庫　藤岡美恵子
桐一葉ゆるりと舞いて着地せり　兵庫　髙見正樹
・舞ひて、舞うて
竹林を透かして朝の冬紅葉　奈良　田原春
冬紅葉オペラ独唱流れ来て　奈良　田原春

玉取の悲話の志度浦牡蠣太る　香川　丸亀葉七子
コンベヤー舟から小屋へ牡蠣流す　香川　丸亀葉七子
時雨の忌ものの気配を深く身に　香川　元屋奈那子
やまと歌仮名序心に桃青忌　香川　元屋奈那子
立冬の日のさしてきし机かな　香川　曽根崇
千年の戦世生きし枯木かな　長崎　川辺酸模
綿虫の世界も戦あるらしく　大分　山本桃潤

十一月三十日号

【特選】

手付かずの一日おそろし古日記　埼玉　園田靖彦
古伊万里の和蘭陀はるか返り花　千葉　池田祥子
二人死にひとり誕生神の留守　東京　西川遊歩
わらつとの納豆売りや雪の朝　神奈川　伊藤靖子
極月や関所の如き検温器　神奈川　原田みる
・ごとく。この違いは？　水面の黙より氷り始めけり　神奈川　三玉一郎
カンカンと炭新しき炉端かな　兵庫　加藤百合子
時雨忌やこれより道を分つ君　奈良　喜田りえこ
思想こそ国の柱よ竜の玉　大分　山本桃潤
じやぶじやぶと発句を洗へ寒の水　大分　山本桃潤
歌仙とは詩の旅なり冬銀河　大分　土谷眞理子

【入選】

ふるまひの大根千本干しにけり　北海道　高橋真樹子
日あたりて爪の先まで冬木かな　北海道　芳賀匙子
短日の独り居なればなほ迅し　北海道　柳一斉
・や　福島　渡辺遊太
燃えあがる煖炉ゴッホの絵の具箱　埼玉　園田靖彦
誤字脱字当て字そのまま日記果つ　埼玉　上田雅子
日向ぼこ次の春までマスクして　埼玉　上田雅子
空澄みて水澄みてあき逝きにけり　埼玉　上田雅子

・秋

ともかくも百一歳や寒牡丹　埼玉　藤倉桂
焼き立てのだし巻き卵今朝の冬　千葉　若土裕子
冬桜あおげば薄き昼の月　千葉　若土裕子
訃報あり落葉踏みしめ行く夜かな　千葉　谷口正人
カトレアや皆集まれぬ誕生日　千葉　池田祥子
海底に沈むがごとく冬の都市　千葉　麻生十三
貧しくも冬大根の菜飯かな　千葉　麻生十三
人生の不孝に冷たき霙降る　東京　いかいあつし
突き出るや泥大根の宅急便　東京　岡田栄美
おでん屋を梯子したのは遠い日々　東京　森徳典
寒空や妻は昼寝の自粛慣れ　東京　森徳典
ゆつくりとつける自信や冬菫　東京　森凜柚
穴穿つ啄木鳥さえも家族持つ　東京　長尾貴代

一人きりの父の命日蘭の花　東京　長尾貴代
蟷螂の骸半分緑色　神奈川　遠藤初恵
逡巡の三年日記買ひにけり　神奈川　金澤道子
ヤマネよりしづかに我の冬眠す　神奈川　金澤道子
しぐれつつ同じお顔の六地蔵　神奈川　金澤道子
ワクチンの後のけだるさ浮寝鳥　神奈川　原田みる
新酒酌みこよい昭和に遊びけり　神奈川　三浦イシ子
しののめの精魂のこる冬山河　神奈川　三浦イシ子
抱き上げて重心のない兎かな　神奈川　三玉一郎
楫くべて午後の当番はじまりぬ　神奈川　松井恭子
冬庭や雉鳩遊び水飛沫　神奈川　森川岑子
雉鳩は羽整へて日向ぼこ　神奈川　森川岑子
落葉踏む音軽やかに退院す　神奈川　水篠けいこ
樽椅子や臓腑に沁みる新走り　神奈川　土屋春樹
筑波嶺の風に粉をふく吊し柿　神奈川　片山ひろし

コロナ禍もしばし忘るる炬燵かな　新潟　安藤文

枯木立ジャコメッティの人の影　長野　大島一馬

信濃雪椒郵書斎「岸の黄」　長野　柚木紀子

いづれも「エール」秋なくさつぎつぎ　長野　柚木紀子

甘ずっぱくなった石榴輩(ともがら)はなればなれ　長野　柚木紀子

明るさの銀杏紅葉を歩きけり　岐阜　夏井通江

この山の椎降る音や幾千万　岐阜　梅田恵美子

・この山に。この違いは？

返信のキーボード打つ置炬燵　静岡　池ケ谷章吾

男の子ゴム縄跳びに混じりたく　愛知　臼杵政治

自転車を置いて銀杏拾うひと　三重　乾薫

・ふ

凍蝶の凍てを解きたる日射しかな　京都　氷室茉胡

存分に水遊ばせて紙を漉く　京都　氷室茉胡

大白鳥影といふものなかりけり　大阪　安藤久美

白鳥翔ちてさざなみのさみしさよ　大阪　安藤久美

代々の墓移しけり返り花　大阪　古味瑳楓

藷焼いて母が待ちたる我が家かな　大阪　内山薫

・の待ちゐし

着ぶくれてころがるやうに登園す　大阪　木下洋子

一口でとろける鰤の照焼よ　大阪　木下洋子

・で？

空寝して大人の話聞く炬燵　和歌山　玉置陽子

ゆさゆさと山揺らしたる蜜柑かな　和歌山　玉置陽子

・揺らし？ぐ

片端から塩錆の出刃牡蠣を打つ　香川　丸亀葉七子

凩の声の行方を聴く夜かな　大分　竹中南行

十二月十五号

【特選】

すきま風縦横無尽の家に住む　東京　長尾貴代
疫病や真つ赤に染まる冬の暁　東京　畠山奈於

風倒の櫻を見舞ふ冬木中　神奈川　中丸佳音
殺戮の果のしづけさ鷹一つ　神奈川　三玉一郎
木枯らしや揺れる屋台で酌み交はす　神奈川　土屋春樹
ちやんちやんこふはりとはおり水仕事　岐阜　夏井通江
スウェターよりまだ出でこぬか母の首　大阪　内山薫
大年やそろりそろりと参ろうぞ　香川　元屋奈那子
人の目に腸さらす寒さかな　長崎　川辺酸模
熱燗や今日の身を置く高瀬舟　大分　竹中南行

【入選】

夕暮れのレモン垂らして牡蠣すする　北海道　芳賀匙子
・や
降る雪を灯す外灯舫ひ船　北海道　柳一斉

想念の無限回転冬の星　岩手　川村杳平
第三波乗り切らんとぞ根深汁　宮城　長谷川冬虹
・とや
越えて来し道を語れよ榾焚かん　福島　渡辺遊太
・下五、名詞
今年また弱み記さず日記果つ　埼玉　園田靖彦
小春日や人湧きいづる川堤　千葉　谷口正人
指ふれて首の驚く冷たさよ　千葉　池田祥子
炭をつぐ父の怒りは言葉なく　千葉　麻生十三
赤赤と魚さばく手に寒の水　東京　岡田栄美
・魚さばく手に赤赤と寒の水
おでん煮て流星群を待ってをり　東京　岡惠
・つ
北風に研いてゐしはいのちなり　東京　長井亜紀
粗大ごみ置場に箪笥十二月　東京　楠原正光

投句日をはや書き込まれ初暦　東京　楠原正光
美術館のカフェ静かなり木の葉散る　東京　堀越としの
風花やはやぶさ2号還り来ぬ　東京　櫻井滋
コロナ禍や深海の海鼠沈黙す　東京　齊藤拓
色づきて檸檬はここと名乗りけり　神奈川　越智淳子
息白く朝の散歩の犬と人　神奈川　遠藤初惠
まだ覚えきらぬ600句古暦　神奈川　遠藤初惠
日向ぼこ心あの木のてつぺんに　神奈川　金澤道子
はなやかに昨日に重ね柿落葉　神奈川　三浦イシ子
邪気払ふあの手この手の年の暮　神奈川　三浦イシ子
・あの手この手や　神奈川　松井恭子
ぼろぼろの絵本繕ふ雪の夜　神奈川　水篠けいこ
セーターの白に着かへてランチかな　神奈川　水篠けいこ
鯛焼きや嬉しきことの一つあり　神奈川　水篠けいこ
冬耕の軽トラ畦に主を待つ　神奈川　湯浅菊子
・冬耕や　神奈川　那珂侑子
冬の空高くに吾子の濯ぎもの　神奈川　片山ひろし
煮凝の鯛は骨まで啜りけり　新潟　高橋慧
冬の虹短く太く消えにけり　石川　花井淳
・太く短かし　石川　岩本展乎
富士そばてふ立食ひ処討入り忌　長野　大島一馬
数へ日の妻口ずさむ「異邦人」　長野　柚木紀子
・や　岐阜　梅田恵美子
木守柿白き連山迫り来る　岐阜　梅田恵美子
・迫りけり　愛知　青沼尾燈子
去年今年種馬牝馬眸子黒黒　愛知　青沼尾燈子
今頃や山廬の軒の吊し柿　青沼尾燈子
見つからぬ事も一興茸とり　青沼尾燈子
凍てる月懐に入れあたためん　青沼尾燈子
静かさや師走の隅の通夜の椅子　青沼尾燈子

・隅に

雪が降るコロナの死者に雪ふりつむ　愛知　服部紀子

今しばしふたりの道が続く冬　愛知　服部紀子

灯を入るる仏間ひっそり寒に入る　滋賀　寺田光子

・つ

雑炊や夫に重ねし嘘いくつ　京都　氷室茉胡

孫に買ふ昔のおもちや終大師　京都　氷室茉胡

おでん酒通天閣の真つ赤なる　大阪　古味瑳楓

ごみ箱の口のそれぞれ年の暮　大阪　高角みつこ

まあたらし銀杏落葉の朝の香よ　大阪　高角みつこ

ため息をつけばたちまち年の暮　大阪　木下洋子

新札に替へて正月待つてゐる　大阪　木下洋子

革命の一年なりきちやんちやんこ　大阪　澤田美那子

だんだんと不安の募る年の暮　兵庫　千堂富子

わが子にも白髪ちらほら木守柿　兵庫　藤岡美惠子

母の忌や樽の白菜水上ぐる　奈良　喜田りえこ

寒卵医師看護師の尊かり　奈良　喜田りえこ

縫ひにけり猫に揃ひのちやんちやんこ　香川　丸亀葉七子

手焙りの仄かな火種いとしめり　香川　元屋奈那子

冬薔薇日陰りて虻しづかなり　香川　曽根崇

注射打つ女の指の冷たさよ　長崎　川辺酸模

ひややかや腸のぞく医師の声　長崎　川辺酸模

幼子に焚火のこころ教えたく　大分　山本桃潤

浦人の快気祝ぞ鰤一本　大分　竹中南行

矛盾突く校正のペン冬の月　大分　竹中南行

しずもれる暗き海へと消ゆる雪　鹿児島　大西朝子

タナトスの隣に御座す冬の母　鹿児島　大西朝子

葱刻むシミひとつ無き割烹着　鹿児島　大西朝子

十二月三十一日号

【特選】

微動だにせぬ閑かさや大嘘　福島　渡辺遊太

だんだんに遺言めきて日記果つ　埼玉　園田靖彦

数ページむしりとりたる古日記　埼玉　園田靖彦

ぬめぬめと滑る昆布を結びけり　埼玉　上田雅子

宇宙ごみ闇に漂ふ寒さかな　千葉　池田祥子

・闇を

ぎこちなく六尺離れて年の礼　東京　横山直典

・離れ

東京が頭を垂れる除夜の鐘

怪物のひととせやつと歩み去る

・一年

冬の水しづかに冬を映しけり　神奈川　三玉一郎

書初の大書は墨の枯るるまで　神奈川　片山ひろし

人の息大地の息や寒造　石川　花井淳

しわしわの命も命初笑ひ　愛知　稲垣雄二

すつぽんと大根抜くごと年新た　愛知　稲垣雄二

蓮枯れて名残の骨の幾許ぞ　京都　佐々木まき

授かりし男女の双子竜の玉　京都　氷室茉胡

鏡餅単純にして静かなる　大阪　澤田美那子

静けさに神宿るらん鏡餅　大阪　澤田美那子

はや誰か参りし後のけさの春　兵庫　千堂富子

初茜大屋根小屋根わかちあふ　奈良　喜田りえこ

碧落や潜んでをるは冬将軍　香川　丸亀葉七子

・碧落に

人類の大転換や注連飾る　大分　土谷眞理子

・人類は大転換へ。動きを。

【入選】

故郷の旧町名に正月来　北海道　高橋真樹子

・へ

ががいもの種髪に見惚れ十二月　北海道　芳賀匙子

やどりぎのぼんぼりほのか初御空　北海道　芳賀匙子
・ほのか、ダメ。
自意識だ?犬にでもやれ枯野行く　北海道　柳一斉
宴果てて港に降れる雪を見に　北海道　柳一斉
雪折や任にあらざる新総理　宮城　長谷川冬虹
煤逃げて山幸句集三読す　宮城　長谷川冬虹
・句集山幸
繭玉やくるくる回る女の子　秋田　佐藤一郎
・繭玉と?
初雪や面影橋を僧ひとり　秋田　佐藤一郎
・ひとりゆく。坊さんでなくてよろし。
冬菫雪の中より目覚めけり　埼玉　上田雅子
華やぎも無きまま屠蘇を祝ひけり　埼玉　上田雅子
冬川に水輪ときおり何棲むや　埼玉　藤倉桂
・ときをり。自分でなされたし。

コロナ禍や大根炊き上ぐ飴色に　埼玉　藤倉桂
・飴の色
聞きなれし声に振り向く除夜詣　千葉　若土裕子
初夢の仄とうれしき名残かな　千葉　若土裕子
疫年のとどのつまりや除夜の鐘　千葉　谷口正人
片づきしことなき今年除夜の鐘　千葉　谷口正人
・こと何もなし
軽トラに青竹匂ふ年用意　千葉　池田祥子
北に向かふ蝶の危ふし冬の海　千葉　麻生十三
耳遠き犬とながむる冬の虹　東京　岡田栄美
雪の町かすかに夕日ありにけり　東京　岡惠
葛湯吹く花の匂ひと言はれしが　東京　岡惠
庭先に年酒冷やす亭主かな　東京　市村さよみ
・年酒を。庭先に、あいまい。庭に出し?

味薄き今年のごまめまなこ澄む　東京　市村さよみ
今日よりは今年よりはと年の暮れ　東京　森徳典
新植のブナの木眠る山眠る　東京　森徳典
ここらみなわが庭柚子の風呂に入る　東京　神谷宣行
年行くや羽ばたきさうな金閣寺　東京　西川遊歩
クリスマステネシーワルツ独りうたう　東京　長尾貴代
・ふ
伊勢海老を網から外す手際かな　東京　楠原正光
ビル街にスケート場の灯りかな　東京　楠原正光
・ビル街の、灯りけり
日記買ふまず命日と誕生日　東京　堀越としの
遺しゆく日々いとほしや除夜の鐘　東京　堀越としの
リハビリに花を咲かせんお屠蘇くむ　東京　櫻井滋
老い二人命百まで屠蘇祝ふ　東京　櫻井滋
ブラインド一枚ずつ拭く年の暮れ　神奈川　伊藤靖子
・づつ。自分で。
青森の雪の町より来し林檎　神奈川　伊藤靖子
年の湯や母しづかにて子もしづか　神奈川　越智淳子
冬夕焼早め早めの厨ごと　神奈川　遠藤初惠
処方薬まず受けとりに年用意　神奈川　遠藤初惠
・まづ。自分で。
ユーミンの歌にさくさく年用意　神奈川　原田みる
枯草を抜けば豊けき大地の香　神奈川　原田みる
・豊かな。ふつうに。
舟一隻茫々として冬に入る　神奈川　三浦イシ子
・たるや
まづ緊急外来番号年用意　神奈川　松井恭子
天地のすみに菜園注連飾る　神奈川　松井恭子
付句にて繋りし年惜みけり　神奈川　松井恭子
綿虫や誰か来そうで誰も来ず　神奈川　水篠けいこ

ゴム草履冷たき朝の厠かな　神奈川　水篠けいこ
胸ひろげ帰帆のごとく白鳥来　神奈川　中丸佳音
白光に白菜ゆだね静かなり　神奈川　湯浅菊子
鴛鴦のどれが夫婦か花鳥園　神奈川　那珂侑子
破魔矢受く誰を射るではなけれども　神奈川　片山ひろし
初富士を夫婦で仰ぐ露天風呂　神奈川　片山ひろし
朝霜や魚板一打にて動く　石川　花井淳
一束として大根の白きかな　石川　岩本展乎
・にして
人の死を山と数へし年越へん
尾白鷲人間界の病み覗く
・病深く
梟のブックエンドにわが句集
・梟や
荘厳にオルガン抜ける寒気かな　長野　大島一馬
・荘厳の、とほる
順に山やま眠るつもり「生得の位」　長野　柚木紀子
やすらかな心となりぬ毛糸編み　岐阜　夏井通江
・む
冬雲の遊ぶらし照り翳る部屋　岐阜　三好政子
・照り翳る部屋冬雲の遊ぶらし
後ろざまに身を投げて打つ除夜の鐘　岐阜　三好政子
・後ろへと
野に畑に人いなくなる初景色　静岡　池ヶ谷章吾
・誰もをらざる
初席の撥ねてこの店鴨蒸籠　愛知　臼杵政治
扉開け去年と今年を入れ替へる　愛知　服部紀子
薪足して言葉少なく冬籠り　愛知　野口優子
搗き立てのあんころ餅や小晦日　愛知　野口優子
冬木立山の子細のあらはなる　京都　佐々木まき

年惜しむ母と面会出来ぬまま　京都　氷室茉胡
かたくなに開かぬ抽斗年の暮　大阪　安藤久美
柚子風呂や借りものの身を労はらん　大阪　安藤久美
蓬莱へ船乗り継がむ年の暮れ　大阪　古味瑳楓
冬日向残してゆづるベンチかな　大阪　高角みつこ
初雪のはやも闇夜を横降りに　大阪　高角みつこ
心細しと文が届きぬクリスマス　大阪　内山薫
・手紙届きぬ
新しき年の力や豆の餅　大阪　木下洋子
・常套
無頼にはなれぬ父居る炬燵かな　大阪　齊藤遼風
雪積むややさしきものの形して　兵庫　加藤百合子
ゆく年やコロナの傷の満身に　兵庫　天野ミチ
・を
初夢や覚むればテレビ鳴っており　兵庫　高見正樹

・つ。自分で。　奈良　喜田りえこ
暁闇の厨の灯し大晦日　奈良　田原春
・灯る
鰹節揃へ安心年の暮　奈良　田原春
招きくるる息子家族やクリスマス　奈良　田原春
疫よ去れこの寒梅を盾とせん　岡山　齋藤嘉子
・疫病へ梅一輪を
もう少し生きてゐたしや福寿草　香川　曽根崇
天狗岳の風来て柿の熟るるなり　愛媛　古志溢子
雪見酒夫唯今別世界　長崎　もももたなおよ
煤逃げと大きテレビに入りゆく　長崎　もももたなおよ
ひやひやと刺さる視線や大嚔　長崎　川辺酸模
煤逃げの男ら集ふコンペかな　長崎　川辺酸模
与願印の御手重からん煤払　大分　竹中南行
初めてや夫と二人の年越よ　大分　土谷眞理子

・は

【選者のコメント】

・投句のさい、これでわかってもらえるか、他人の目でご確認ください。自分の目ではなく他人の目。これができないといつまでも自立は無理。

・説明（理屈）は俳句からもっとも遠い。説明しようと思っていないか、チェックを。

・できるかぎり動きがでるように言葉を選ぶように。「片手の家路」よりは「片手に家路」。

・言葉を無理に押し込まない。削ること。秋小道→秋の道

・不必要な漢字を使わない。等、共など

・取り合わせの句、物と物、現実と現実ではたかが知れている。次元の異なる取り合わせを。

・旧仮名は辞書で勉強、確認を。特別の本、不要。

・思うことをいうのが句の基本。思うことを五七五に当てはめてはいけない。

・俳句は通じるように。

・作ったら必ず見直してください。これで通じるかどうか。

・戦争の句は、『俳句の宇宙』に書いた忌日の句同様

真情がすべて。

・旧かなは『伊勢物語』で学んでください。

・何よりも心に届く句を。

・それだけ考えていれば、細かなことは自ずから身についてきます。

・そうならなければ、心の持ち方の問題。

・これで相手に届くかどうか、推敲をお忘れなく。

・器用に作った句はダメ。

・何よりも心を打つ句を。そのためには心の据えどころが肝心。方法、文法など瑣末な問題はすべてそのあとをついてくる。

・旧かなの場合、特別の本を読む必要はありませんが、怪しいと思ったら必ず辞書を引いてください。小さく旧かなが書いてありまあす。ネットの辞書にはありません。

・現状安住では俳句は難しい。妻であるとか老人であるとか。
・日記ならともかく。
・読み直すこと。
・旧かなの勉強を。
・人の句に学ぶこと大事。
・あすはネット投句のスクーリング（今のところに年1度）です。間に合うよう選句しました。
・俳句を作ったら、それで通じるかどうか、必ず読み直してください。意味不明の句あまたあります。
・てにをは、注意を。主格の「の」あやうし。
・描写不全、感情過多？　伝わらない句あまた。
・俳句で説明は不要です。
・てにをは、ご注意ください。
・どこかで聞いたような、見たような句が多い。
・そんな句を自分でも作りたい、と思っているのでは？
・ここから改めてください。
・どこかで聞いた、見た句は作らなくてよろしい。
・句は自分だけでなく、他人にもわかるように。
・一度作ったら、必ずそのチェックを。
・いままでにどんな句が詠まれているか、知ることが大事。
・どんなことをどう詠めばいいか、わかる。
・そのためにも名句の暗唱を。
・今年もまず６００句の暗唱から。
・若き日の怠り（欠落？）を補うにはこれしかない。
・もう一度基礎固めを。

高齢化時代の俳句の鉄則

1）孫に溺るるなかれ
2）老いを嘆くなかれ
3）思ひ出に浸るなかれ